

---

# **転生した異世界で金を荒稼ぎ**

**ビフィズス菌**

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生した異世界で金を荒稼ぎ

### 【Zコード】

Z5527Z

### 【作者名】

ビフィズス菌

### 【あらすじ】

高校生のお小遣いよりも月収が安く、  
その上毎日16時間労働という過酷な人生を歩む俺は  
ハードブラック会社に遅刻しそうになり、  
車にはねられて死んでしまった。

しかし、死んだ俺を待っていたのは天国でもなく、地獄でもなく、魔物がうようよいる異世界であった。

異世界で金を稼ぐのが目的のダメ人間な俺は  
怪しげな魔術師に魔法を強制的に教えられ、

そのまま異世界で生活する」となる。  
果たして異世界生活を満喫する「とまどり」ができるのだろうか？・・・

## ダメ人間の異世界転生（前書き）

唐突に思いついたものを書いてみました。  
更新頻度はあまり多くないと想いますが  
ぼちぼちUPしていくので宜しくお願ひします！  
タイトル横の残金表示は邪魔なので消しましたw

## ダメ人間の異世界転生

俺は斎藤広幸。さいとうひろゆき 会社員だ。

俺の勤めている会社は給料が極端に安い。

ハンパじやない。月収が高校生のおこづかいよりも少ない。その上、上司はがみがみうるさくてストレスが溜まる。

まあここは1億歩譲つて我慢してあげよう。

しかし、俺の一番気に入らない点がある。それが・・・

重労働だ。俺の会社は一日16時間もの労働をする。

なのにこの安い給料なんだ。給料を60倍くらいにしてもらいたいものだよ。

そして俺も俺だ。顔は中の下、運動神経0。通知表も今までずっとALL1だった。

恋愛経験ももちろん0なわけで、俺はダメ人間の代表と言つても過言ではなかつた。

そんなある日、俺はハードブラックな会社に遅刻しかけた。

俺は非常に焦つている。それもそのはずだ。

ハードブラック会社は1秒でも遅刻した瞬間に、その月の給料が0になる。

いくり少ないとほいい、ただ働きだけは「めん」だ。

俺は朝食を食わずに家を飛び出した。

といつよりは食べたかったが冷蔵庫にはなにもはいっていなかつた。

「あと3分!」俺は更に走るスピードを上げた。

しかし、俺は運動音痴だ。足の速さも小6と変わらないくらいの遅さだ。

俺は自分の足の遅さに嘆きながらも走り続けた。

「あと一分ーー！」やつと会社が見えてきた。  
しかし会社にたどり着くまでには大きな壁がある。  
横断歩道だ。ここでの信号は一度タイミングを逃すと、一分くらいは青に変わらない。

俺がたどり着いた頃には既に赤に変わっていた。

「ちくしょおおおおーー！」俺は何も考えずに信号無視をした。  
「ぎゃあああーー！」俺は案の定車にはねられた。  
いや、俺は車にはねられることを願っていたのかもしない。  
だんだんと意識が薄れていく。俺は目をつぶった。

8月21日。斎藤広幸、死亡

「・・・本当にこんな人生の終わり方でいいのですか？」どこからか声が聞こえる。

俺は目を開くとあたりは真っ暗であった。

すると、闇の中から青いマントを着て杖を手にしている一人の男が現れた。

「あなたは・・・？」

「私は魔術師、簡単に言つたら魔法使いと言つたところでしょうか？」男は言つ。

「は、はい？」俺は聞き返した。

それもそのはずだ。魔術師？魔法使い？そんなものが世界のどこにいるというんだ。

いるわけない。あれは物語上の話であつて実在するはずなんてないのだ。

「おや、信じられないという顔をしていますね。」魔法使いは笑いながら言った。

「おいおい、そんな奴いるはずないんだよ。大人をからかうのもいい加減にしろ」

「それがいるんですよ。少なくともこの世界にはね」

「一体どうこいつですか？」俺の頭の中で、マークが渦巻く。

「簡単に話を説明しますね。まずアナタはこの前車にはねられて死にました。

そして、本来ならそこで物語終了だといつところですが、作者はそこまで甘くないのです。

あなたはもともとの世界ではクズ人間、ゴミ人間、生きる価値のない人間・・・

我々はそのような生きる価値の無いクズ人間にチャンスを与えるのです。

もしアナタがもう一度人生をやり直したい、と願うのであればそれを叶えてあげます。

そう、我々の住む世界、異世界で！」

「・・・・。」俺は全く理解できなかつた。

「おやおや、異世界が何かわからないようですね。

異世界とはアナタが今まで住んでいた世界とはかけはなれたものです。

スライムやドラゴンなどの『魔物』が世界にうようよいたり、魔術師、剣士、盗賊などなど色々な職業をやつてている人たちが魔物を討伐したり、アイテムを採取したりと『クエスト』をこなして、その報酬金で生活しているのです。どうですか？あなたの勤めていたブラック会社より簡単で大量に金稼ぎができますよ」魔術師は言う。

「なるほど・・・しかし俺が異世界にいきたくないと言つたらいどうなるんだ？」

「それもアナタの判断です。まあその時はアナタをそのまま死後の世界へと送りますがね」

俺は考え込んだ。今まで生きていてるくなことはあつたらいどうか？もしこのまま異世界に行つたとしても楽しく生活していくのだろうか？

俺は考え込んだ。・・・そして結論をだした。

「俺は異世界で金を荒稼ぎしたいんだ。だから異世界に行く」と云ふ。「俺は言つた。

実際、俺はこの世界を通して自分を変えようと思つたのだ。

「わかりました。それでは田をつぶしてください。

そして目を開けたときには広い草原がある場所にあなたはいるでしょう。

そこでアナタは私を見つけて話しかけてください。」そう言い残し魔術師は消えていった。

「これから俺の第一の人生が始まる・・・」俺はそのまま田をつぶつた。

今から俺の異世界での人生が始まるのだ。

目を開けると俺は魔術師の言つたとおり、草原にいた。

「ルリはビーだ？」俺は魔術師を探し始めた。

俺がしばらく草原の周りを搜索していると小屋のよつたな場所を見つけた。

「お待ちしていましたよ」魔術師はその小屋からでてきた。

「では早速異世界について詳しく説明しますね。

この異世界で生活をしていくに働くかなくていけません。  
しかし働くといってもそんな簡単にはいきません。

ギルドに登録し、そのギルドでクエスト受けて、魔物を倒さなくてはいけません。

そこでアナタにはこれから私と修行してもらいます。

あなたが異世界で生活できるようになつたら私がいいギルドを紹介します。

そこでアナタは生活をしてもらいます。まあ私の修行を乗り越えられたらですけど

「おいおい、そんな面倒なことするんですか」俺は呆れた口調で言った。

「じゃあ早速炎の魔術を習得する修行を始めましょつか」魔術師は俺を完璧スル。

そして魔術師は俺の腕を掴んだ後、なにかの呪文を唱え始めた。

次の瞬間、俺は先程までいた草原とは全く違う場所にいた。そこは、周りを崖に囲まれており、ごつい岩が転がっている場所だった。

「では、早速修行を始めます」魔術師は右手をだした。

「炎の精霊よ、我的体に力を示せ！ファイアボール！」魔術師の右手から炎がでてきて、球体を作り出す。

その炎の球体を魔術師は崖の方に投げた。すると、崖の上にあつた大木に直撃し、大木が折れて炎が木に移つた。

あつという間に勇ましかつた大木はただの切り株と炭になってしまつた。

「どうですか？簡単でしょ？」

## ダメ人間の異世界転生（後書き）

感想・評価などなどお待ちしています！

## ダメ人間の初勝利（前書き）

今回は、色々な技を覚えた広幸が  
初めて魔物と戦う話です。  
ちょっとギャグも入れてみました！

## ダメ人間の初勝利

「どうです？簡単でしょ？」魔術師はニヤリと笑い言った。

「簡単じゃねーよ！」俺はツッコミを入れた。

「まあまあそんな焦んなくても一から教えますから」魔術師は俺の怒りを抑えるように言った。

こうして俺と魔術師の修行は始まったのだ…

「ハア・・・・ハア・・・・」

「凄い集中力と頭の回転力・・・アナタは本当にダメでクズな生きる価値のない人間だつたのですか？」魔術師は言う。

「まあ集中力の持続はハードブラック会社で鍛えられましたから。それと俺のことをダメでクズな生きる価値のない人間って言うのやめてくれます？」

「冗談ですよ、冗談。でもここまで習得が早いのは予想外でした。」  
そう、俺は魔術師のスバルタな指導の元、いくつかの魔術を習得したのだ。

・ファイアボール

手のひらに炎の球体を作り出し、相手に投げつける攻撃魔法。  
俺の場合、チャーハンがぎりぎり炊けないほどの火力。当然敵は焼き殺せない。

・アイススピア

手のひらに鋭利な氷を作り出し、相手に投げつける攻撃魔法。  
俺の場合、つらじりとほぼ変わらない。

・イナズマアロー

雷の矢を形成し、相手に飛ばすことで雷撃を与える攻撃魔法。  
俺の場合、乾電池一本分と同じくらいの電流・電圧。

・ウォータードリル

水を激しく回転させ、相手の体を削る攻撃魔法。  
俺の場合、水洗トイレと変わらない回転力。

「……なんか俺の技全部力asmkないですか？」俺は魔術師に聞く。

「そりやそうですよ。あなたはまだ異世界に入つて3日間しか経つてないじゃないですか。

魔力も戦闘を何度もしないと上がりにくいですし、それにあなたはダメ人間ですよ？

そんなダメ人間が異世界に来てチートキャラになるなんて作者が許してくれると思います？」

魔術師は冷静に言った。その口調のせいで、俺のガラスのハートが粉々に割れた。

それからも、俺の魔術師の修行は1週間程続いた。

「ハア……ハア……」

「もうだいぶ安定して魔術使えるようになりましたね。  
じゃあそろそろ実戦と行きましょうか。」魔術師はそう言い、俺の

腕を掴んだ。

そして、俺と魔術師は前にいた草原へと移動した。

「じゃあ早速戦闘を始めましょ。ルールは簡単。この草原に『ブルースライム』という、体が青い色の典型的なスライムが生息しています。

そのスライムを倒してください。

そうすればあなたを一人前の魔術師と認定して異世界の本当の舞台へと連れて行くことを約束します。」

「ちょっと待ってください！俺まだそこまでの魔術は使えないですし……

魔術だって、日常生活を支える程度の貧弱なのしか使えないでもん！」

「まあ頑張つてください」魔術師は人事のように俺の本音をスルーしゃがつた。

「まあやるしかないよな」俺はしうがなく魔術師の言う通りにブルースライムを討伐しにでた。

「どこにいるんだろうか？」俺は草原をくまなく搜索する。ちなみに視力は両目ともにA(2・0)だ。ダメ人間な俺の唯一の自慢できるところだ。

そういうしていりうちに俺はお手当でのブルースライムを見つけた。「不意打ちなら勝てるかもしれない！」俺は卑怯な手を使う。なぜなら自分が勝つためなら手段を選ばないクズ人間だからだ。

「氷の精霊よ、我の体にその力を示せ！アイスピア！」

俺の手のひらに何本かのつららのようなものが出来上がる。  
俺はそのつららのようなものをブルースライムめがけて投げつけた。

つらりは奴の体に突き刺さる。

もちろん全くといつていいほどダメージを『えられなかつた。

というより、俺のつららの完敗だ。あたつた瞬間に、さきつちよが折れてしまつた。

「グギギガ！」スライムは俺の存在に気付き、勢いよく突進してきた。

スライムの発した鳴き声はあまりにも気持ち悪く、  
俺の中の貧弱でかわいらしいはずのスライムのイメージがぶち壊された。

「痛っ！」スライムの突進がモロに俺にヒートした。

だけども所詮はスライム俺と同じく雑魚キャラだ。俺は少しよろけただけだった。

「やつぱり、貧弱魔法じゃ倒すことは不可能か・・・」

俺は考へ込んだ。自分の貧弱魔法でもあいつを倒せないかと。  
そして俺はある方法を考え出した。早速準備にとりかかる。

「じつちまで来い！」俺はスライムから全速力で逃走した。  
さすがにスライムは鈍足だった。小6並の俺の速さにも追いつけていない。

そして、俺はスライムとの距離をとつた後、地面に向かつて魔法を使つた。

「水の精靈よ、我の体にその力を示せ！ウォータードリル！」

俺の手に空氣中の水蒸気が集まり始め、できた水が手の周りを回転し始める。

そして地面に手を押し付けると、地面がだんだん削れはじめた。

そして、ある程度の大きさの穴を作り上げた。

スライムはだんだんと迫つてくる。

「もう時間がないな・・・」俺は手にまとわりついている水を穴へと移した。

穴が水で満杯になる。そして、そこにスライムが飛び込んできた。

「グガガガ？」スライムは水たまりの中に入った。

「今だ！雷の精霊よ、我の体にその力を示せ！イナズマアロー！」俺の手のひらに雷の矢が形成された。その矢を俺は、水たまりへと投げ込んだ。

「グガガギガギ！」スライムは感電した。

いくら乾電池並みの電流だったとはいえ、水は電気抵抗が少なく、スライムに電流がよく通る。

一瞬でスライムがクラゲのように水面に浮かび上がった。

「やつたあー！！俺の初勝利だあー！」俺は嬉しさのあまり歓喜した。

そして俺はクラゲ化したスライムを掴んだ。

「うわあー・・・なんかぬめぬめしてて気持ち悪い・・・」

俺は初めて触るスライムの感触に嫌悪感を覚えた。

しかし、我慢して持ちながら魔術師の方へと向かっていった。

「持ち帰りましたよ、はい。」俺は魔術師にスライムを見せた。

「おお、おぬでじりじゃこあ。やせつあなたなりやれぬじゆうて  
ましたよ。

・・・・・「」これは…? 魔術師はスライムを見て驚いた。

「どうしたんですか?」

「」のスライムは、どうやら青魔石を持つてござりますね。  
ほら、これを見てください。」魔術師はスライムをハサミで切り裂いて  
中の臓器をとりだした。

「何してるんですか! ? 気持ち悪いにも程がある! 」俺は絶叫した。

「まあまあ、ほら、心臓の中に青い石のようなものがありますよね?  
これが青魔石といづブルースライム特有の産物です。  
この青魔石は売るとき、お小遣い程度は稼げますよ。今回は私が買  
取りましょう!」

魔術師はそう言つて俺に30000メイルを差し出した。  
メイルといづのはこの異世界共通のお金だそうです。  
1メイル=約1円と考えてください。

「」これは! ? 俺の円収より高い! ?

「どんだけあなたの会社の給料低かつたんですね?」魔術師もひす  
がに驚いたらしく。

「そんなことはさておいて、これよりあなたを異世界の本当の舞台  
へと送りたいと思います。

あ、卒業祝いに色々とプレゼントを用意しましたよ。」魔術師はそ  
う言つて袋を差し出した。

そして俺は腕をつかまれ、またもや転送された。

俺が目を開けると、そこにはたくさんの人がいて、賑わっている街であった。

中には色々と入っていた。それぞれの物品に説明書のようなものについている。

- ・3万メイル

このお金で宿屋に泊まつてください。

- ・ヒュペノイドコールス

あなたの住んでた世界でいう、携帯電話と同じようなものです。なにか質問等ありましたら、電話してください。

- ・女性用下着

あなたの住んでた世界でいう、パンティと同じようなものです。きっとこの先あなたを助けてくれると思います。

「いらっしゃい！なんの役に立つんだよー」俺はシッコリを入れた。

- ・森羅万象携帯用図鑑

あなたの住んでた世界でいう、ポケモン図鑑と同じです。戦った相手の情報、産物や、アイテム、地図、などなど多彩な機能を持ち合わせた高性能なアイテムです。こいつでポケモンゲットだぜ！

「なんか小説の趣向変わっちゃつてるよー」俺はまたもやシッコリを入れた。

そうして中身の物品を全部確認し終えた。  
あと、もう一つ中に手紙が入っていた。

「広幸君へ、今君がこの手紙を読んだいとしたら君は賑わつて  
る街にいつたところでしょう。

今あなたがいるところはブロンダ街です。

そこにかつて私の相棒であった男の勤めているギルドがあります。  
彼には君の事を説明しているので、ギルドに登録させてもらべると  
思います。

そこで、ギルドに向かってください。そして、登録をしてください。  
場所はポーモン図鑑・・・じゃなくて、森羅万象携帯用図鑑に掲載  
されています。

では、よい異世界生活を

「なるほどな・・・これが」俺は図鑑を取り出した。  
そしてギルドの方へと走り出していく。

田線：魔術師

あれほどまであの男ができる奴だとは思つていませんでしたね。  
やはり私の見込んだだけの奴ではありました。

この先、あのギルドの奴らと仲良くできるといいんですが・・・  
まあ私はアナタの生活を楽しませていただきますよ・・・広幸君

残高：0メイル  
収入：33000メイル  
支出：0メイル

合計：33000マイル

## ダメ人間の初勝利（後書き）

感想・評価などなどお待ちしています！

## ダメ人間のギルド登録（前書き）

今回は広幸がギルドに登録するお話をします。  
早くも美少女キャラが登場しました。  
恋の展開も考えていかねば・・・

## ダメ人間のギルド登録

「イージが魔術師の言つてたギルドか」俺はギルドにたどり着いた。ギルドは3階建てぐらいになつており、大きく「PUNISHMENT」と書かれている。

ちなみにPUNISHMENTと書つのは、『罰』といつ意味だ。なんとも氣味の悪い名前だな。

とりあえず俺はギルドの中に入つていった。

中は酒場のようになつており、壁のボードにはびっしりとクエストが貼られていた。

俺は周りの奴らに奇妙な目で見られる。ビツやうあまり歓迎されないらしい。

俺は周りの目を気にせず、バーカウンターの方へと歩いていった。

「何を飲みますか?」バーテンダーは聞いてくる。

「いや、ちょっとギルドに登録したいんだが・・・」俺はそうつづつた。

すると、周りの奴らの目の色が豹変し、みんな寄ってきた。ちょっと氣味が悪いと思いつつも、俺はその場に立ち止まっているとその中から一人が話しかけてきた。

「おい、お前にこをどこだと思つていてるんだ?」そいつは言った。

「いや、普通にただのギルドだと思つていてるけど・・・」俺は普通

に返答した。

「ふざけてんじゃねえ！！クソガキが！」俺はそいつに殴られた。周りの奴らが止めにかかる。俺はフラつきながらも、バー・テンドーに聞いた。

「なんであいつ怒っているんですか？」バー・テンドーは答える。

「しょうがないですよ。このギルドの奴らは気性が荒くてね。特に今のやつ、ペスカは誰よりも新人が嫌いなんですよ。それより、本当にこのギルドに登録していいんですか？まあいいと言うのならオーナーの所で手続きしてください。オーナーは3階にいます。」

「まあ、」一寧にありがとうござります」俺はオーナーのいる3階へと向かっていった。

目線：ペスカ

なんか変な新人がのこと入ってきやがった。

そいつはなんだかわかんないけど一番腹がたつ奴だった。

俺はそいつに聞いてみたんだ。

「おい、お前ここをどこだと思っているんだ？」と。すると奴は、「いや、普通にただのギルドだと思っているけど……」って答えた。

なめてやがると俺は思つたんだ。そして気付いたらそいつを殴つていた。

全く、気に食わないがギルドに入るならしきがない。でもできるだけかわらないうにしておこう。

目線：広幸

「「」がオーナーのいる部屋か」俺はドアを開けようとした。ドアの取つ手を掴んだ瞬間、俺は思わず身震いをした。

中にものすごい奴がいる、それを肌で感じたんだ。  
しかしあつ後戻りはできない。俺はあいつに殴られてから思つたんだ。

「絶対にこのギルドに入つて、あいつを超えてやる」と。

俺は勢いよくドアを開いた。

「すいませんーこここのギルドに登録したいんですけど

椅子に座つていた男は立ち上がつた。男はとても巨大な体で、もの凄い筋肉であつた。

「なんだ？お前が魔術師ロウの言つてた男か？」巨大な男は言ひつ。

「はい。私はロウ師匠に魔術を教えていただき、このギルドに入りたいと志願しました。」

こうこう時はあんな野郎にでも敬意を表さなくては。

「よかわい。あいつの頼み」とだ。・・・それに何よりお前は面白そつな感じがする。」

「はい？」・・・「の男、全く意味がわからん。

「お前、元からこの異世界にいたわけでは無いな」男は言った。  
この男、どうやらただものでは無いらしい、と俺は感じた。

そして俺は正直に全てのことを話すこととした。

「なるほどな・・・お前は一度死んでおり、口うるさいって異世界に転生されたわけだな。

そのような奴は他にも何人も見てきたぞ。まあどうも死んでしまつたがな」

「そんな恐ろしいこといわないでくださいよー」俺は身を震わせ言った。

どうやら転生してきた奴らは俺以外にもたくさんいるらしい。しかし、異世界は前の世界にあつたゲームのようには進まず、だいたいの奴は魔物に殺されてしまつそうだ。

「ははは、まあお前にはなにか特別なものを感じじる・・・よしー、ギルド登録の許可をしよう!

これからお前はこのギルドの一員だー!」の世の中の平和のためにクエストをこなしてくれ!」

「わかりました。でもこれだけは言わせてください。  
俺は平和なんかのためにクエストはやりません。全ては金を稼ぐためだけです」俺は言う。

カツコよく言つてみたが、内容は金目当てのただのクズ人間だ。

「ハハハハハー!」といつは面白い野郎だ!

あ、自己紹介がまだだつたな。俺はギルド『PUNISHMENT』のオーナー、カーキ・フレアだ!

これからよろしく頼むぜ。早速だが、お前はこの街をあまり知らないようだ。

ちょっとギルドの一員に案内してもいいよ!とフレアは言った。

「わかりました。これからよろしくお願ひします!」俺は頭を下げて言った。

これから俺の金稼ぎが始まるのだ、と思ひと喜びを抑え切れなかつた。

しかし、異世界生活はそんな簡単にいくものでもなかつた。

田線：魔術師ロウ

「じつやう無事にギルドに登録できたようですね」私は広幸と電話していた。

「はい、ちゅうと気に食わない奴がいましたけど・・・」彼は言つ。

「やはりそうでしたか・・・まあこれから彼らと打ち解けていくてくださいね。

あ、あとギルドでは単体行動もいいですが、パーティーを組んでおいた方がいいですよ

「なるほど・・・まあ誰か気の合ひそうな奴がいたら組みますよ。それじゃあ」彼は電話をきつた。

やはり、彼は面白い。面白いですよ。

じつそりフレアとの会話を聞いていましたが、

金田荘でクエストをやる、とオーナーに堂々と言ふ人がいるでしょうか?

彼にはどくとくの魅力がありますね、それが裏田にでないといいのですが・・・

「まあもう少し楽しませてもらいましょうか、広幸君」

田線：広幸

俺はちやんとギルドに入会することができた。

そして俺は今、人生最大のチャンスを迎えていた。

俺は剣士をやつているらしい女人の人にこの街を案内してもらうのだ。その女子が尋常なないほどにかわいい。てか一目惚れしてしまった。

その女子は青色の瞳をしていて、まさに異世界って感じだった。

髪の毛は茶色で長髪、身長は俺より少し低いくらいだ。

そして、顔は整つており、女優をやつていけるくらいの美形であった。

スタイルも抜群。くびれているお腹、足もけつこう長い、更に豊かな胸で、モデル体型であった。

これは尋常じゃない。写真を撮つて見せてあげたいくらいだ。

まあこの世界にデジタルカメラなどという機械は無いのだろうが。

「あ、あの、そ、その、」、今回は宜しくお願ひしますううううー。  
ダメだ。ありえないほど緊張する。先程から手汗が半端じゃない。

「そんな緊張しなくてもいいんだよー」おうおう宜しくねー」女子は普通に話しかけてきた。

声もかわいい。もう全てがかわいい。

でも俺みたいなダメ人間が手をだしてはいけない存在なんだ、と俺は痛感した。

「よ、よろしく。俺の名前はヒロコキ。君の名前は？」俺は震えを

「いや、なんとか話した。

「私の名前は、ハーブ！剣士をやつているの。でも私も3日前にギルドに入ったばかりで・・・あ、でもヒロコキよりは先輩だねっ」ハーブは今以上に近くに寄りそってきた。

もうダメだ！！俺の心臓が張り裂けそうううううー！俺は初めて恋というものを知った。

「じゃあれいへり街案内するよー」やつ言いながらハーブは俺の手を握ってきた。

「うふ、うふ、うふおーーー！」俺は顔を真っ赤に染めた。

「いやしてると、恋人同士みたいでしょ？・・・ダメ・・・かな？」ハーブは俺に上目遣いを使つてきた。これがもうたまらませえええん！！

「は、はやく、あ、案内、し、してくれよ」もうカタコトで何を言つてゐるかわからなー。

「はーはー、はじめにこーが武器屋だよーー！」おおかたの武器は買つうことができるからお金に余裕があつたら買つといこー！

ちなみに武器は強化するひともできるのー詳しく述べは店舗こまくといよ。じゃあ次ね！

俺はハーブに手を引つ張られ、道具屋、雑貨屋、宿屋などなど、色々な場所に手を握られたまま案内された。

「きょ、今日は色々教えてくれてありがとな。じゃあ俺は宿屋に泊まりに行くわ」

「ひからひを楽しかつたよー!じゃあ明日ギルドでねー」ハーブはそう言って人ごみに消えていった。

「ハーブか・・・覚えておいつ「俺は宿屋を田描した。

田線：ハーブ

今日は面白い少年に出会った。

私が悪戯でちょっと手を握つてみたら頬を真つ赤に染めてた。  
なんだろ?「すくわいかった。私、ちょっとあの人のこと好き  
なのかも・・・

まあ、ちょっと案内しただけだし氣のせいよね。

明日一緒にクエストに行ってみようかな。ちょっと仮になるし。

「あー明日が楽しみだなー」そつづぶやさき、私は家の中へと入っていった。

田線：広幸

「すいません。ちょっと今月、この宿に泊まりたいんですけど」俺は宿屋の人についた。

え?なぜ、1ヶ月単位で泊まるかつて?そりゃいつちのほうが安く

すむからだよ。

こういうのって、一田で泊まるのより、一ヶ月で泊まつたほうが少しだけ一田あたりの値段が下がるんだよね。俺はちょっとした節約をした。

「わかりました。では30000メイル頂戴致します。」

「げっ！高いな！・・でも一田なら1500メイル、つまり一ヶ月ではだいたい45000メイルってところだな。これなら15000メイルの得だ。これくらいは我慢しよう。」

「はい、どうぞ」俺は30000メイルを差し出した。

「確かにいただきました。ではこちらが部屋の鍵です。鍵をなくした際は、追加で5000メイル支払っていただきますので」「承お願いします。」

「はいはい」俺はそう言って鍵を受け取り、自分の部屋へと向かっていった。

「ここが俺の部屋か」

部屋はけっこう広かつた。2ドアで、寝室にはベッドがあらかじめついている。

30000メイルでの部屋はなかなかのものだろう。

「明日から俺の異世界生活が始まるんだな」俺はベッドに横たわり田を開じた。

明日から俺の金稼ぎが始まると、俺はつきつきしてじょうがなかつた。

残高 : 33000 メイル  
収入 : 0 メイル  
支出 : 30000 メイル

合計 : 3000 メイル

## ダメ人間のギルド登録（後書き）

感想・評価お待ちしています！

主人公の魔法、キャラクターなどのアイデアも募集しているので  
何かあつたら是非お願いします！

## ダメ人間の薬草納品（前書き）

今回は広幸の初仕事です。  
ちょっと適当になつてしましましたが勘弁してください　ww

## ダメ人間の薬草納品

目線：広幸

気持ちのいい朝、昔の世界とは変わらずに俺はカーテンを開いた。少なくとも、こんな気持ちの悪い生き物が空を飛んでいなければの話だが。

「グエヒヒヒ！」たくさんのドラゴンが飛び交っている。

「やつぱつ！」は異世界なんだよな」俺はドラゴンを見て「こじが異世界なことを思い出す。

そう、この世界はRPGゲームでしか想像もできないような『魔物』が生息する世界なのだ。

俺はギルドへと向かった。今日が俺の初仕事なのだ。  
そして俺はギルドへと到着すると、ボードを見始めた。

「まずは簡単そうなクエストからだな。」俺は採取クエストを探し始めた。

そう、採取クエストは比較的初心者向けのクエストである。  
戦闘を避ける事だって可能なわけだ。俺の雑魚魔法では勝てる気がしないので俺はこの採取クエストを選んだ。

「ほつほつ、『薬草納品』か・・・割と簡単な仕事だな。  
内容は？・・・薬草10kgで300メイル支払います、か。よしこのクエストにしよう」

俺は薬草を採取するクエストを引き受けた。するとそこには聞き覚えのある声の女がやってきた。

「ヒロユキー！一緒にクエスト行こーー！」

「そう、そいつはハーブだった。やばいやばいやばいやばい周りの男達がじーっと見てる。

どうやら嫉妬されているようだった。早く俺はこの場から逃げ出したい。

「お、おい、周りが見てるんだけど・・・」俺はハーブにしゃべりいた。

「じゃあ早くクエストに行こうよーー！ナリナリなきゃ・・・泣いちゃうよ？」

ハーブは田をうるわしげに言つた。

「ぐつ！？・・わかったわかったから！・・泣くな！」俺は必死に言った。

・・・ハーブめ、随分と卑怯な手を使いやがつて・・・  
もしこんなところで泣かれては、俺がいかにも悪役と勘違いされてしまう。

もちろんハーブのことが好きな奴らは俺に襲い掛かるであろう。

「やつたー！ヒロユキとデートだー！」ハーブは大声で言つた。  
その瞬間、俺は周りから殺氣を感じた。どうやら誤解されたらしい。  
でも今は誤解を解いている場合ではない。

俺はハーブを手を掴んでギルドから急いで飛び出した。

「・・・お前のせいだ大変な目にあつたじゃないか」俺はハーブに  
言った。

「まあまあ気にしなくていいんじゃないかなー？」

「気にするよ！またギルドに戻つたら大変な目に遭いそうだ怖いよ！」俺は言った。

「それよりヒロユキ、なんのクエストに行くの？」ハーブは聞いてくる。

「わづだな、まずは安全なこの薬草採取のクエストに行こうと思つ」「よーし、それじゃあ出発……」

「ちよ、ちよ、ちょまでえええいいい！」ハーブは俺の腕を掴んで強引に引っ張つていった。

「ハーブが今回の場所か……」俺とハーブは広い森へと来ていた。

この世界には色々な場所がある。  
火山・氷山・洞窟・地下などなど様々な場所があり、  
その場所に応じてでてくる魔物、強さ、クエストの難易度がかわつ  
てくるのだ。

今回俺達は一番簡単な場所の、『森林』へと来ている。

俺は早速、図鑑を開いて出現する魔物を調べた。  
どうやら出現する魔物は、

#### ・ブルースライム

初期の雑魚モンスター。体で体当たりをして攻撃するが、ダメージはほぼ0だ。

産物：『青魔石』300メイル～3000メイル

### ・ゴブリン

初期の雑魚モンスター。手に持っている何かの動物の骨で攻撃してくれる。

ブルースライムよりは強烈だが、決して強くは無い。  
産物：『ゴブリンの毛皮』 500メイル～300メイル

この2体ぐらいにらし。これなら俺の雑魚魔術でも撃退できるかも  
しない。

まあ薬草田当てだから戦闘はなるべく避けるけどね。

「じゃあ私はどうすればいいー？」

「せうだな、とりあえず薬草を採取しまくつてくれ。

俺はちよつといいことを考へたんだ。」俺はハーブに指示した。

「わかつたよ！たくさんとつてくるからねー」ハーブは走り出して  
いった。

「さてと・・・俺もとりかかるか」俺はニヤリと笑つてハーブと反  
対方向へ向かつていった。

### 目線：ハーブ

私は今、ヒロコキとクエストにきてるんだ。

クエストはかなり地味なやつだけど、ヒロコキと一緒にならなんでも  
いいや！

薬草もだいぶ集まつてきたし、ちよつと魔物でも倒してみようかな。

「あ、あんなどひじゴブリン発見ーー」私は腰につけていた剣を  
抜いて接近する。

「ゴブリンはまだこっちに気が付いていないようだよ。

「チャンスー！」私は剣をゴブリンに振りかざした。

「ゴブゴブゴブゴブー！」剣はゴブリンに突き刺さった。  
どうやらゴブリンはお怒りの様子なんだよ。

ゴブリンが襲い掛かってきた。私はもう一度剣を振りかざす。

「ゴブゴブ……」ゴブリンは瀕死になつたんだよ。

「とどめだー！」私はゴブリンの心臓に剣を突き刺した。

「やつたー！初めて一人で倒せたよー」私は初めて魔物を倒したことに感動を覚えた。

しかし、そんな私も感動も一瞬で壊れてしまつた。

「ゴブゴブゴブゴブ……」周りからゾロゾロとゴブリン達が現れる。  
一瞬で私はゴブリンに囲まれてしまつたの！

「あああああああーーーー！」

目線：広幸

「きやあああああーーーー！」俺はハーブの悲鳴を聞いた。

「美少女がピンチなら、助けに行くフラグが強制的に立つちまうん  
だ！」俺は痛感した。  
ハーブになにかなければいいんだが・・・

俺はハーブのいる場所にたどり着いた。どうやらゴブリンに囲まれ

てこるらしい。

「ハーブ！助けに来たぞ！」

「ヒロコキー！ありがとつー！」こつらなんてぶつ飛ばしちゃつて……。その言葉は俺の心に突き刺さる。

「……じめん、俺の魔術、殺傷能力ないんだよね……」こつらなんて殺せないよ……。」

「え……俺とハーブの間に沈黙が生まれる。

「ゴブゴブゴブー！」ギリヤーボブリン達は俺に気付いたらしく、襲い掛かってきた。

「……つたぐ、やるしかないよな！ハーブ！ちょっと協力してくれ！」

「わかつたわ！……何をすればいいの？」ハーブはゴブリン達を押しのけ、俺の方へやってきた。

「そうだな……周りの木を切り倒してくれ！」俺はゴブリン達の気をひきつけながら言った。

そして、俺の作戦が始まった。

「ある程度は切り落としたよー！」ハーブは息を切らして言った。さすがに4本もの木を切り倒すのはきついであろう。

ハーブは俺の理想通りに切り倒した木で四角形をつくってくれた。

「よし。ありがとう。じゃあちょっと離れておくんだ。」

俺もゴブリン達から逃げつつも色々と準備を終えていた。

俺はゴブリンをひきつけながら木でできた四角形の中におびき寄せた。

「今だ！炎の精靈よ、我的体にその力を示せー・ファイアボール！」

俺の手からチャーハンが炊けないほど炎の球が発射された。  
それと同時に、俺は木でできた四角形から外側に出る。

その球はゴブリンに当たるのではなく、木へと直撃して引火した。

「ゴブゴブゴブ？」あつとう間に火は木から木へと移り、  
ゴブリンの逃げ場を完全に塞いだ。

「これでなんとかなったな。とりあえず薬草集めて帰るか」俺は言った。

俺らは薬草を集め終わり、ギルドへと戻ってきた。

「これが今回の依頼の納品物です。」俺はフレアに薬草を渡した。

「おお、これは大量だな。ふむふむ・・・1000000円といこうか。  
よし、報酬だ！ありがたく受け取れ！」俺は薬草と交換で報酬金を  
もらつた。

100 ポンドについで 300 メイル、  
ハーブと山分けするので 150 メイルだな。なかなかの稼ぎだ。

「じゃあ帰りますね。」俺はギルドを後にしようとしました。

その時、「あんなにたくさん薬草で取ってきたのー?」とハーブが聞いてきた。

「おい、俺は金稼ぎのためならなんでもするんだぜ?」

薬草に似ている葉っぱを適当に入れといったからあんなに稼げたんだよ。」

「・・・最悪」ハーブに軽蔑的な目で見られてしまった。

そして俺はギルドを出る。その瞬間に俺は周りから殺氣を感じた。

「おい、お前、どうなるかわかつてんだよな?」

それは、男達だった。そうか、誤解はまだ解けていなかつたんだ。

「なんだこいつなるんだあああああああー!」

- - - 目線・ハーブ

ヒロユキはただのダメ人間だった。

薬草のかわりに変な草いれるし、まともな魔術は使えないし・・・

でも、助けにきてくれたヒロユキすつづくかつによかつたんだよー! また今度も一緒にクエスト行けるといいな。

“ひつやー私、本当にヒロゴキのことが好きになっちゃったみたい・・・

残高：3000メイル  
収入：1500メイル  
支出：0メイル

合計：4500メイル

## ダメ人間の薬草納品（後書き）

今度は討伐クエストを書いてみたいと思います。  
その前にハーブの邪魔をする美少女キャラもだしてみたいけど・・・  
感想・評価・お気に入り登録お待ちしています！

## ダメ人間のブルースライム討伐～その1～（前書き）

今回は2話にわけてみます。

一話一話は短いですが、内容を濃くしようと思います

## ダメ人間のブルースライム討伐／その1～

目線・広幸

俺の荒稼ぎ生活2日目。まだ異世界には慣れていない。

俺は質素な食事（100メイル程度のやつ）を食べて、ギルドへと向かつた。

「なんかいいクエストないかな？」俺はギルドにつくなり、ボードを見始める。

その時、魔術師から電話がかかってきた。

「はい、もしもし」

「もしもし、私は。異世界生活は楽しんでいますか？」

「なんか稼ぎやすくて楽しいです。魔術が強ければもっとといいんですけど・・・」

「まあまあそれはしょうがないです。そこであなたの参考程度になればいいと思って電話しました。

まず、金を稼ぐために簡単なクエストをたくさんやるものいですけど、

討伐クエストをやってみてください。

採取クエストよりは難易度は高いんですけど、報酬が高めです。

そして、産物を獲得すると、それを売つてボーナス報酬もゲットできますし、

魔物を倒すことで、経験値的なのが溜まって魔力が上がりります。

つまり、強力な魔術を発動することもできるようになります。どう

ですか？」

「なるほど。確かに俺にとつての利益は大きいですね。  
じゃあそします。では、俺はアドバイスをもらつて電話を切つた。

「じゃあこれで行くか」俺が選んだのはこのクエスト

『ブルースライムの裏』

- ・基本報酬 一体につき、500メイル
- ・産物『青魔石』 一個につき、500メイル

だそうです。

俺はクエストを受注し、ギルドをあとにした。

途中、雑貨屋に寄つて『イグリュスの羽』(500メイル×5)を  
買つ。

→『図鑑データ』

イグリュスの羽。森林に生息するイグリュスの翼から入手した羽。  
非常に油を含んでおり、ある程度の衝撃を『える』と着火する。

俺は羽に衝撃を『えな』ようにして森林へと向かった。

森林に着いた。それと同時に俺は森のなかへと入つていく。

「ここはいい場所だな。」俺は森の中の広いスペースを見つけ出した。

え?何をしているかつて?簡単じゃないか。俺が普通に戦うとでも

思ってるか？

罠を仕掛けでスライム達を一網打尽にしてがっぽり稼ぐのだよ。

俺は早速は周りの草を大量に引き抜いた。

「草はOK。水の精靈よ、我的体にその力を示せ！ウォータードリル！」

俺の手から水洗トイレ並の回転力の水流ができる。

それで地面を削り、そこそこのサイズの穴を掘る。

そしてそこに、先程引っこ抜いた草と、イグリュスの羽を入れる。

この罠を1時間程かけて5つ作り上げた。

「さてと、罠は完成だ。それじゃあ奴らを集めに行くか。」俺は森の奥へと入つていった。

早速何体かのスライムを見つけた。

「ひやっほう！」俺はスライムに飛び蹴りを入れた。

当然ダメ人間な俺の蹴りの威力はほぼ〇だ。スライム様はどうやらお怒りの様子。

「グガガギガ！！」その奇妙な鳴き声と共に、周りから大量のスライムが集まりだす。  
ざつと30体は超えたであろう。俺はその数に恐怖と歓喜の入り混じった複雑な感情を覚えた。

「やーいやーいバカ共が！こちまで来いよー」俺は挑発しながら逃走した。

スライムたちは俺を追いかけてきてる。そのまま罠のところまで逃げ切れば俺の勝ちだ。

俺は気付けば小6並の足の速さから、中1並までと進化をとげていた。

・・・といつてもポツチャリ系の中1と変わらないが。

俺は遅いながらも必死に罠のほうへと走る。

そして、なんとか罠のところまでたどり着くことができた。

「百方！俺の勝ちだぜえええええ！」スライムたちは俺の後ろを追つてくる。

そして次々と罠に引っかかり始めた。

罠の場所に乗つかると同時に、羽が衝撃によって着火し、草へと引火する。そして、見事スライムの丸焼けの完成というわけだ。

あつという間に俺を追つてきたスライム達計30体は丸焼けになつた。

表面が焦げてボロボロになつてゐるが、産物を取るために切り開くと、中は生温かくてドロドロしている感じがたまらなく気持ち悪い。

とりあえず俺は、『青魔石』を10個ほど手に入れた。

そして、森林をあとにしようとした。

その時、空から巨大な魔物が現れる。

褐色の翼を持ち、尻尾が長く、くちばしのついている鳥と龍の混ざったような魔物だ。

しかし、俺はその翼に見覚えがあつた。

そう、この魔物は、本物のイグリュスだった。

## ダメ人間のブルースライム討伐～その1～（後書き）

続きは明日のお楽しみ♪　ww  
感想・評価・お気に入り登録お待ちしています！

## ダメ人間のブルースライム討伐～その2～（前書き）

今回で初めての討伐クエストの話は終わりです。  
今回はあるキャラが・・・？？つて感じです。

## ダメ人間のブルースライム討伐／その2

俺がブルースライム討伐を終え、産物を取り出した後、ギルドに帰ろうとしたときに、あの褐色の羽を持つ龍の魔物『イグリュス』が現れる。

俺は果たして逃げられるのか！？

「グエニエニエニエ！」イグリュスは色々となぞめいた奇声を発した。スライムよりも気持ちの悪い声は、俺をイラつさせた。

「つたく、今はお前とやりやつてられねえんだよ」俺は青魔石を抱えながら逃走する。

すると、後ろからイグリュスが攻撃してくるのを見た。

「グエニエニエニエ！」イグリュスは翼を大きく広げる。すると、勢いよく回転し始め、羽を飛ばしてきた。

羽は途中で炎をまとい始めた。

あいつの羽は非常に油を含んでいる。そして空気抵抗により炎がついたのだ。

炎をまとった羽は俺に直撃する。

「つお……熱つ……」俺は羽に当たったが、致命傷は避けられた。しかし、炎は周りの草木へと移る。早く逃げないと逃げ場がなくなってしまう。

俺は青魔石だけは捨てずに、なんとか逃げようとした。

しかし、イグリュスは俺をしつこく追つてくる。

「グエエエエエエエエーーー！」再びイグリュスは回転始めた。回転の勢いは先程よりも増しており、かなりの羽を飛ばしてくるであらうと俺は考えた。

「これがラストチャンスだな」俺は燃えてない場所へと必死に走る。しかし、あと一步遅かつた。

横で燃えている木が倒れ、俺の逃げ場所を完全に塞いだ。

「くつ！一万事休すか！」俺は奴の大量の羽の猛攻をあびて力尽きるのかと考えると、足の震えが止まなくなってしまった。

「グエエエエエーーー！」先程の3倍近くの量の奴の羽が俺めがけて飛んでくる。俺は思つた。ここで異世界ライフも幕を閉じるんだな、と。

しかし、俺の考えは单なる妄想にすぎなかつた。

「おい、新入り！なにしてんだ！早く逃げろ！」ずぶとい声が聞こえ、

俺めがけて飛んできた羽が全て凍りついた。  
そして俺の目の前には大きな剣をかついだ、見覚えのある男が立っていた。

それは最初に俺がギルドに訪れたときに俺を殴ってきた奴、ペスカであった。

「お、お前はー!？」

「「ひみせえー早く逃げろっていつてんだよー」ペスカは怒鳴った。

「あ、ありがとう。」俺は青魔石を抱え逃走した。

目線：ペスカ

「やつといなくなつたか」俺は剣をイグリュスへと構えた。

「グヒヒヒヒー！」イグリュスは随分と怒っている。  
翼を大きく広げ、勢いよくダイブしてきた。

「つたくよ・・・面倒だな」俺は剣を襲い掛かつてくる奴の顔面に  
ぶつけた。

「グギヤアアアー！」イグリュスは痛みに絶叫した。

あいつの顔は凍り始めた。え？なぜそんなことができると？

俺の一番得意な魔術なんだが、『アイスブレイク』という魔術がある。

この魔術は簡単に言えば、自分の体から絶対零度に近い温度の冷気  
を出して、

その冷気を武器にまとわりつかせて攻撃しているんだ。  
だから武器に触れた瞬間にだいたいのものは凍りつく。

「グエエエエー！」俺が説明をしているうちに奴は自分の翼を燃  
やし始めて  
氷を溶かしているようだ。

ちなみにイグリュスは翼全体を燃やし始めると、もうかなり弱つ  
ている証拠だ。

それと同時にあいつも覚悟を決め、今まで以上に猛攻をしてくる。

「ギャアアアア！！」イグリュスは空へと大きく舞い上がった。

その姿は、不死鳥を連想させる。まあ死にかけだから不死鳥というよりは瀕死鳥だけだ。

「グギヤアアア！！」奴は俺のボケをスルーし、上空から一気に俺の方へ下降してきた。

「とじめだ！」俺は剣を飛んでくるあいつへと大きく振りかざす。剣が頭へとモロにヒートする。そして、イグリュスは動かなくなつた。

「よし、帰るか」俺は、イグリュスを抱き上げて、ギルドへと向かつていった。

目線：広幸

まさかあいつに助けられるとは思つてもいなかつた。

あいつは本当はいい奴なのだろうか・・・俺は疑問に思う。

「とりあえず後でお礼は言わないとな」俺は報酬金を受け取り、あいつの帰りをまつた。

ちなみに今回の報酬は、

基本報酬：15000メイル

産物報酬：5000メイル

だ。かなり上出来であろう。

「おう、帰つたぞ」そしてあいつは帰つてきた。イグリュスを担い

で。

「おお！これは大きいイグリュスだな！」周りの奴らがペスカにたかる。そいつらを蹴散らしながらペスカは報酬金をもらいにきた。ざつと見たところ、一万メイルくらいはあつた。猛烈に金がほしくなつた。

しかし、俺はそんな恥ずかしい感情を押さえ込み、お礼をした。

「さつきはありがとな。」

「気にするな。あいつは俺の獲物だった。そこにお前がいて邪魔くさかつただけだ。」

やはり「こいつは一言一言ムカつくやつだ。しかしここは大人になろう。

「ああ、お前のおかげで助かったよ。本当にありがと。」

「べ、べ、べ、べつに気にするなど言つてるだろ！」少しペスカの顔が赤くなつてゐる。

「い、これは、お、お前の入団祝いの、プ、プレゼントだ！」  
そう言つてペスカは1万メイルを差し出してきた。俺はものすごく興奮した。

「本当にくれるのか？」

「ああ。お、俺の目的はイグリュスの素材だしな。・・・嘘が下

手なやつめ。

「ありがとう！今度は一緒にクエストにこうなー。」

「あ、あの、俺、俺はお前のこと気に入ったわけじゃ・・・」

俺は最後までペスカが喋り終える前にギルドを後回した。

「あいつ・・・結構いい奴じゃないか」俺はちょっと嬉しかった。

目線：ペスカ

やつぱりあいつは色々とおかしい。

人の話は最後まで聞けよつ一つの。

でも、俺は少しあいつのことが気に入った。

ん？なぜかって？それはだな・・・あいつには何か他の奴には無いものを感じる。

あの戦い方、普通の奴ならまず考え付かないだろう。  
でもあいつはそんなせこい手を使ってスライムを一網打尽にしていた。

あいつはもの凄く頭のキレる奴だ、と俺は考えたんだ。

今度一緒にクエストについて観察してみるのも面白いかもな・・・

残高：4500メイル  
収入：30000メイル  
支出：100メイル

合計：34400メイル

## ダメ人間のブルースライム討伐～その2～（後書き）

どうでしたか？

感想・評価がもらえたりするとかなり嬉しいです。  
めっちゃ 小説頑張りたくなります。

できれば感想・評価・お気に入り登録してもらいたいです。  
てかしてくださいw w お願いします！！

## ダメ人間のゴブリン討伐～その1～（前書き）

今回も討伐クエストを入れてみました。  
そろそろハーブもだしたほうがいいのかな・・・

## ダメ人間のハフリン討伐～その1～

目線：広幸

荒稼ぎ生活3日目。俺は、かなり昨日頑張って稼ぎまくったため、今日のご飯は奮発することにした。もしかしたら人生初の贅沢なかもしれない。

本日のメニューは魔物の肉、かなり栄養価の高い野菜、炭酸ジュースという豪華な物だ。

ちなみに今日のご飯には3000メイルを注いだ。これだけあつたら一ヶ月は持つ食費なのに。

「びやあ、あ、あうまひい、いい、」

俺はあまりにも興奮してしまい、マオさん的なものになってしまった。

さあ、俺はひと時の幸せを味わった後、また今口も荒稼ぎへと行くのだ。

「さてと・・・なんかいいクエストないかな・・・」

俺は討伐クエストの中でも簡単そうなのを選ぶ。いつか魔力が格段を上がり、チートキャラになることを信じて。

この頃ハーブには会わない。一体どこで何をしているのだろうか。少しだけ、いやかなり気になります。尋常じゃないです。

「お、このクエストならちょっと難易度も上がつていいかもしねないな」

俺がそう言つて受注したクエストは、『ゴブリン撲滅運動』だ。

#### （クエスト説明）

最近、森林に大量のゴブリン達が現れて、森の木を無差別になぎ倒しているようだ。

このままではせっかくの森林の大切な樹木がなくなってしまうかもしれない。

だからできるだけ多くのゴブリンを倒してくれ。報酬は多く支払う。

- ・基本報酬 ゴブリン一体 × 1000 メイル
- ・産物報酬 ゴブリンの毛皮一枚 × 800 メイル
- ・物品報酬 薬草 × 10 個

あ、ちなみに物品報酬というのは、クエストを完了した後に依頼主からもらえる物品のことで、

アイテム、素材、装備品、魔術書（魔術を習得するのに必要な本）などなどがもらえる。

「よし、そうと決まれば罠の準備だ」俺はギルドを後にし、雑貨屋へと向かっていく。

言うまでもないが、魔術が強くならない限り俺はせこい手しか使うつもりはない。

しかし、今回のクエストはちょっと厄介な点がある。

ブルースライムの産物は内臓にあるためボコボコにしても構わないが、この「プリンの産物は毛皮だ。そう簡単に傷つけると引き取つてもられないだろ?」

「今回は……とりあえずピアノ線が欲しいところだな。」

俺は雑貨屋でピアノ線（50mにつき700メイル）と、電熱線（50mにつき700メイル）をそれぞれ50m買ひ。これで準備は整つた。

「早速出発だ！」俺は張り切つて森林へと向かつた。

森林は確かに以前よりも木が減つていた。環境破壊はよくない、と俺は思つた。

早速森林の奥へと足を踏み入れると同時に、電熱線を手袋の上から右手に巻きつけ始めた。

あ、ちなみにこの手袋は、この前一緒にハーブとクエストにいった時に、プレゼントとしてもらつた。どうやらお揃いらしい。まあそんな余談はおいといて、俺は一重に履いた手袋の上に電熱線を巻きつけておいた。

そしてそれが完了すると、ピアノ線を2本の高い木の一番高いうところの間に45m程、蜘蛛の巣のように巻きつける。その木はもうかなりボロボロで、簡単に折れるが重量感があるという性質があつた。

そしてピアノ線の残りの5mくらいを他の一本の木に巻きつける。その木の根元を掘り起こしておいて、少し跳る程度で倒れるようにしておいた。これで全自动カッター機の完成というわけだ。

ゴブリン達が俺を追つてきてその蜘蛛の巣トラップの場所へとやつてくる。

その瞬間、俺は木を思いつき蹴る。

蹴られた木は倒れ、その木の重みで2本の木は衝撃に耐えられず折れる、はずだ。

すると、奴らの頭上に折れた木とそこへ巻きつけられていたピアノ線が落下してくる。

重量感満載な木のおかげで、落下スピードはとても速くなり、一瞬で奴らの頭をぐちょぐちょに・・・おつとこれ以上は想像にお任せしよう。

そんな恐怖の拷問器具のような罠が今完成した。

誤つて自分がその罠に引っかかると間違いなく、即死 異世界生活終了である。

俺は絶対にミスをしないと誓い、ゴブリン達をおびき寄せにせりて深部へと向かつた。

「炎の精霊よ、我の体にその力を示せ！－ファイアボール！」  
俺がそう言ひ放つたと同時に、左手に炎の球が形成される。だつたらゴブリン達をかなりお怒りにさせむ手段は一つ・・・

「炎の精霊よ、我の体にその力を示せ！－ファイアボール！」  
俺がそう言ひ放つたと同時に、左手に炎の球が形成される。その球を、俺は一番大きな家へと飛ばした。

そう、今俺がしていることは放火だ。

住み心地よい住まいが無くなってしまつどんな動物でも悲しいである。

その原因を作ったのが俺なのだから、絶対に俺を殺そうと追つてくるはずだ。

俺はそれを狙っていた。そして、ぞくぞくとゴブリン達が家から急

いででてくる。

俺は魔術を使い、放火を続けた。ビーフやハーブプリン達は俺が放火してこないと気付いたらしい。

「ゴブゴブゴブゴブ…」ゴブリン達は一斉に俺の方へと走ってきた。ガツガツ20体くらいであろうか。なかなか上出来じゃないか。

俺は罠の方へと走り出した。ゴブリン達はなかなか足が速い。じわりじわりと、俺とゴブリンの距離は近くなつていった。

「うおおおおおおおー」俺はなんとか罠のところまで逃げ切つた。

走ってきた勢いを利用して、罠を始動させるための木を蹴つた。

木に俺の脚が当たつたと同時に、木はゆっくりと倒れ始めた。そして、その木の重みで、2本の木が折れる。そして蜘蛛の巣のようになつたピアノ線が落ちてくる。

「ゴブ?」ゴブリン達は上を見上げた。そして罠に気付いたらしく、逃げよつとしている。

しかし、ちょっと気付くのが遅かつた。

ゴブリンの頭上にピアノ線が落ち、ゴブリンの大半はピアノ線により体を切り裂かれ、口では表現できないよつになつてしまつた。（自主規制により、リアルには表現いたしません）

しかし、3体程のゴブリンは罠を回避したらしく、ピンパンしていくる。

「やれやれ・・・もつ一つの罠を使つことになるとは・・・できれば今の罠で即死してもらいたかつたんだが」俺は生き残つてしまつたゴブリンに同情した。

しかし、俺だってこの異世界で生き抜くためならどんな手段も選ばない。

「いぐぜえええええええ！」

## ダメ人間のゴブリン討伐～その1～（後書き）

今回は主人公の作る罠を考えるのが大変でした。  
感想・評価お待ちしています！  
あと、主人公の仕掛ける罠でいい案があつたらアドバイスください  
！

## ダメ人間のゴブリン討伐～その2～（前書き）

今回は後半戦です。

暇は多少適当な気もしますがご勘弁を・・・

## ダメ人間のゴブリン討伐～その2～

「いくぜえええええええ！」俺はゴブリンの方へと走り出した。「ゴブブー！」ゴブリンは手に持っている尖った骨で殴りかかってきた。

「危ねえ！」俺は骨が体に当たるギリギリで回避した。そしてそのまま他のゴブリンも華麗に避け、先程の罠のところへ行く。

「これなら使えるな」俺は罠に引っかかり、表現できないほどグロテスクなものへと豹変してしまったゴブリンの持っていた骨を頂戴する。その骨も先が鋭利になつており、皮膚に傷をつけることはできそうだ。

俺はゴブリンから逃げながら、その骨に、電熱線を巻きつける。そして、俺の手と骨は電熱線を通してつながっている状態へとなつた。これで準備完了だ。

「ゴブゴブゴブー！」ゴブリンは一気に飛び掛ってきた。

「うおおおおおー！」俺は尖った骨を一体のゴブリンの胸部に突き刺す。

「ゴブー……」ゴブリンは痛みに苦しんでいる様子。その間に俺はゴブリン達を囲むように周りをグルグルと回り始める。え？何をしているかつて？・・・今俺は、ゴブリンに電熱線を巻きついているんだよ。

そして、今からじわりじわつとここにこりを苦しめていくんだよ。

電熱線を巻きつけられたゴブリン達は身動きが取れなくなつた。そこで俺は魔術を発動する。

「雷の精靈よ、我的体にその力を示せーイナズマアローー！」

俺の右腕に雷がまとい始める。ちなみに魔力が上がって、今では乾電池3本分まで進化した。

その雷は矢を形成するのではなく、電熱線へと流れていった。電熱線は電気が通ると、熱を帯びる。いくら乾電池3つ分でもそこそこの温度にはなるであります。

しかし、電熱線を巻きつけている俺の手もやけどしてしまいます。

そこで俺はハーブから貰つた手袋を二重にして装着したのだ。これならやけどは避けられる。

手袋をしていても、電熱線が熱くなつていくのを感じた。

それと同時に、「ゴブリン達の悲鳴が聞こえます。

手袋をしてても熱が伝わつてくるんだ。奴らは相当熱いであります。

ちなみに俺が電熱線を選んだのには理由がある。

それは、ゴブリンの毛皮をあまり痛めたくないからだ。

第一の罠では体が引き裂かれるだけで、毛皮としての価値を十分に残すことができる。

そして電熱線は、炎の魔術と違つて毛皮を焦がしてしまつ可能性はかなり少ない。

多少傷はつくかもしねないが、価値はそこまで下がらないで済むだろ？。

そういうじてこむつひ、パンプリン達は氣絶してしまつた。これでクエスト終了だ。

俺が今回倒したパンプリンの数は30体。  
今回は綺麗に倒せたということで、全パンプリンから産物である毛皮を剥ぎ取れた。

そして俺は産物を抱え、ギルドへと帰つていった。

「これが今回の報酬です。」そう言われ、俺が渡された茶封筒の中に

基本報酬	パンプリン × 30体 = 3万メイル
産物報酬	パンプリンの毛皮 × 30枚 = 2万4000メイル

計 5万4000メイルが入っていた。かなりの高額であろう。  
さらにそれと別に家に物品報酬である薬草が届くらしい。

俺は報酬額を見て飛び跳ねていると、ハーブが現れた。

「ああー・ヒュウキ～何そんなに喜んでるのー？」

「おお、さっさパンプリンのクエストに行つてきてね。  
それで今回の報酬があまりにも高かつたもんで喜んでいたのさ。」  
俺はお金を見せた。

「わあーーすいこお金だあ！・・・じつなつたら明日またデータを行こうね」

でたぞ・・・ハーブの人を困らせる発言。このせいで俺は殺されか

けたのである。

そして今も周りから冷たい視線を浴びる。めちゃめちゃ背中が痛い。

「……俺は無言であった。そこにハーブの追い討ちが来る。

「……ダメ?」ハーブは必殺技の上田遣いを繰り出してきた。これには俺も逆らえない。

「わかったよ! いけばいいんだろ! いけば!」俺はもうやけくそになっていた。

「やつたあ! ジャあ明日10時にギルド前集合ね!」そう言つてハーブはでてしまつた。

「はあ……俺の給料があ……俺は自分の発言に後悔した。そこに殺氣が近づいてくるのを感じた。

「おい、ちょっとといいか……?」それは、ギルド中の男達であった。

また俺はこの男達に恨まれて、精神も肉体もボロボロにされてしまうのか……

「いやだああああああああ!」ギルド中に俺の悲鳴が響いた。

目線：ハーブ

今日は久しぶりにヒロコキとあった。

最近はクエストが忙しくてずっと会えなくて寂しかったんだよ。

だから明日は精一杯楽しみたいな！クエスト以外での初デートだもん！

・・・って私、まだヒロコキと付き合ってないのに・・・  
明日には思いを伝えられるとといなーってか明日、絶対に思いを  
伝えるんだから！

田線・魔術師ロウ

どうやらヒロコキ君の事を好きになってくれた人ができるようですね。

彼はこの世界にきて新しい人生を歩み、生きることの素晴らしさを感じてくれたでしょうか？

感じてくれると私も転生した甲斐があります。

まあ、まだまだ異世界生活も始まつたばかり。これからも頑張ってもらいますよ。

明日のデートの様子、楽しみにさせてもらいますね。

残高：3万4400メイル  
収入：5万4000メイル  
支出： 4400メイル

合計：8万4000メイル

## ダメ人間のゴブリン討伐～その2～（後書き）

次はデートの話です。

なにカリクエストあつたら気軽に言ってください！

## 転生前の世界での出来事【玉鶴】（前書き）

幕間で好きなものにしてみたかったので  
こつち側にもつてきました！

本編とは関係ないですが、見ていただければありがたいです。

## 転生前の世界での出来事【出勤】

「俺の初出勤。俺は過去ずっとA-L-L-Eなダメ人間で、社会に受け入れられるとは思っていなかつた。

そんな俺にもとうとう仕事が決まつたのだ！」

「行つてきまーす」俺は朝食を食べずに、いや、正確には食べるものが無かつたので食べずに家をでた。もちろん一人暮らしだから当然さつきの「行つてきまーす」の返事は返つてこない。

俺は勉強面だけでなく、運動面、人間性その他もうもうがありえないほど残念なのだ。

当然彼女もいるわけなく、さびしい生活を送つている。

「よーし、会社で新しい出会いをするぞー！」俺は無駄な妄想をしながら会社へと向かつた。

この時、俺は会社が超ハードブラックなことを知ることも無かつた。

「(主人公)が例の会社だな。よし、きりっと挨拶をせねば」俺は服装をピチっと決め、

会社の中へと堂々と入つていった。

「今日からここで働かせていただくことになりました！斎藤広幸です！」

一生懸命働きますのでこれから宜しくお願いします！」

入るなり頭を深く下げる。これで掴みはバツチリなはずだ。

・・・あれ？何も反応ないぞ？

俺はそう思いながらゆうくりと頭を上げた。

するとそこには、俺以外にふとった社長らしき人間と、従業員一人しかいなかつた。

「ノオオオオウー！」俺は今まで描いていた妄想をぶち壊されたため、発狂した。

「ああ、君が新人ね。早速仕事にとりかかつてもううから。」  
「座つて」

社長らしきテブが言う。そいつが指差したのはみかん箱だった。

「あ、あの・・・」れ[冗談ですよね？]

「いやいや、真剣だよ。ほら、早く座つて。コレ今日中に仕上げで  
ね」

俺が半ば強引に座らせられると、みかん箱の上に俺の身長並の高さの山積みにされた紙が乗せられた。これを今日中に仕上げるといふらしい。

「ちよつと・・・正氣ですか？みかん箱潰れちゃつてますけど・・・

「

「いやいや、真剣だつてば。じゃあ宜しく」

そう言つて社長は自分の席（みかん箱2つとこりよつとグレードの上がつてゐやつ）に戻つた。

「はあ・・・やっぱりこんなところだつたのか・・・」俺はじょりがなく仕事にとりかかる。

これからこの紙と永遠に戦いを繰り広げていいくのかと思つて、俺は泣きたくなつた。

16 時間後

「つふー・・・せつと終わったし・・・」俺はせつとの想いで仕事を終えた。

従業員らしい1名はもう仕事を終え帰ってしまったらしい

せりはう事に貰われると、實際もおへなるがうだ。

「よし、よく頑張ったな。今日は帰つていいぞ」デブは言った。

「はい・・・さよなら・・・」俺は人生に絶望しつつも、家へと帰つていった。

それから俺の死闘が始まった。

毎日山積みにされる書類を仕上げる。これで16時間はかかる。  
もちろん、休憩なんてものは無い。そんなことをしている時間がも  
つたらない。

そして・・・ついに給料が手に入つた。

「今月はよく頑張ったね。これが給料だよ」俺はテブから茶封筒をもらつた。

「よっしゃああああああ！これで俺も大金持ちだ！」

俺はいままでの辛せが一気に吹き飛ぶよつた気がした。

俺は恐る恐る中身を見る。

そこにでてきたのは・・・・・

「2500円って・・・なんじゅこつやあああーーー」

俺が仕事恐怖症になつた瞬間であつた。

## 転生前の世界での出来事【出勤】（後書き）

他にもリクエストあつたらお願ひします！

## 転生前の世界での出来事【パン屋と俺】（前書き）

「こつも場所変えです。  
面白くはないと思いますが見ていただけるとありがたいです。

## 転生前の世界での出来事【パン屋と俺】

異世界に転生される前の俺には魔術を使えるような能力は無く、言えただのダメ人間だった。

そんな俺は現在、ハードブラック会社で得体の知れない書類を仕上げる。

こんなもの一体何に使うのだろうか、とつぶづぶ思つてはいるが社長は答えてくれない。

そんな俺にも昨日給料が入ったのだ！・・・高校生のおじつかいより少ないが・・・

「やつぱり毎日食事はしたいよな。でも一ヶ月をこの金でしのぐのは・・・」

俺は半分あきらめていた。しかし転職するあても無く、もしも今の会社を辞めたら俺の給料が高校生のおじつかいから今までという大きな変化をとげてしまう。

「とりあえず、何に金を使うかを色々まとめてみようか」

俺は一ヶ月をこの極端に少ない収入で生活する方法をまとめてみた。

①一ヶ月で必要な物資を買つ場合②

水道代

本来ならちゃんと水を使いたいところだ。しかし、こんなことにお金を使つてはいる余裕は無い。

「公園の水を使えば問題ないよね」俺はまず一つの壁を乗り越えた。  
水道は使わなくても生活していくんだろう。

### ガス代

これも生活の上ではまず欠かせない存在だろう。しかし、俺には金の余裕が無い。

「ガスは必要ないな。ガス使うもの買わなければいいんだし」「また俺は壁を乗り越えた。

しかし、これで大幅に食事の選択肢が減つてしまつた。セロリとかしか買えないだろう。

### 電気代

これはマジ必要。コレが無いならもう生活じゃねえええ！…って感じなものだ。

しかし、今の俺に電気代なんてものは払えない。  
「いらないよなー。だって仕事から家に帰つてきたらもう寝るしあ、あとレンジとかも使わなければいいんだよな」

電気代を〇円にするにより、加熱という選択肢は無くなつた。  
更に冷蔵庫も使えないでの、食材の保存もできなくなつてしまつた。

### 食費

これだけは乗り越えられない壁である。俺が人間である限り避けて通れないものだ。

「よし・・・これに全額を注ぐしかないよな」俺は確信した。

しかし今までの節約により、加熱、長期保存という選択肢が消えた。  
「もう俺にはセロリと共に生活するしか選択肢はないのか・・・

俺があきらめかけた時、一筋の光が見えた。

「パ、パ、パ、パンの耳ならもうえる…！」

そう、パン屋では大概はパンの耳を捨てたり、お客様にあげるものだ。

つまり、そのパンの耳を貰う事ができたら食費は〇になるかもしれないのだ。

しかし、この作戦には難関がある。

それは、パン屋のパンの耳を『貰える条件だ。

一番嬉しいのは、パンの耳をただで好きなだけ持つてっていいと言つてくれる店だ。

これならその店に暫くは寄生できる。

一番田は、一つだけだぞ、って言つてくれる店だ。

この店のパターンなら一口分は確保できるであらう。

しかし、次から貰える見込みは無い。だから一度きりと考えるのが無難だらう。

そして最悪のケースは、「あーすいません、パンの耳はパンをお買  
い上げの方に1個差し上げるつていうシステムになつてているんです  
よ」だ。

これがきたら、「やっぱこいです」ってこうことが精神的にできな  
くなつてしまつ。

つまり、強制的にパンを買わないといけないフラグが立つてしまつ  
んだ。

「とりあえず大まかな作戦は立てられたな。明日から実行だ！」  
俺はとりあえず寝ることにした。

「今日は決戦の舞台だ！」俺は公園でトイレ・水分補給を済まし、決戦の舞台へと舞い降りた。

「いらっしゃいませ。」無愛想な男の店員が言つ。これはかなりの難関かもしれない。

しかし、後には引けない。まずは店員を『よくしゃせぬ』とからだ。

「あなたのつくったパンってありますか？」

「・・・メロンパンです」無愛想に言つ。

「あーこれ凄くおいしそうですねー」の焼き加減、表面の『げ真合』、香り・・・

全てが完璧ですよー！」

「やつぱつそつ思ひますか！」先程までの無愛想な店員がまるで別人がのように変わった。

それから、俺は店員と1時間以上メロンパンについて話をした。  
ここらへんに交渉してみてもいいんではないのか、と思い俺は話をきりだす。

「ちょっとお願ひがあるんですけど・・・」

「なんですか？」彼は目を輝かせている。これはチャンスだ。

「パンの耳を分けていただけませんか？」

「・・・・・・・」

「あ、あの・・・」

「帰れ！――」

「ひいいい！すいませんでした！」俺は急いで外へようとする。  
その時、店員が俺の腕を掴んでそっと袋を渡した。

「何も言わずに立ち去れ」

その中にさ、大量のメロンパンが入っていた。

「あ、ありがとうございます！」

こうして俺の収穫祭は幕を閉じたのである。

P · S  
俺、メロンパン好きじゃないんだよね・・・

転生前の世界での出来事【パン屋と俺】（後書き）

感想・評価お待ちしております！

## ダメ人間の恋愛初体験（前書き）

今回はハーブがヒロユキに告白しづらやつ話です。  
結ばれるべきか・・・結ばれないべきか・・・  
まだ結末考えてません！

## ダメ人間の恋愛初体験

目線：広幸

俺は昨日、荒稼ぎをした。それをハーブに自慢したら、デートに行くはめになってしまった。

「せっかくの金があ・・・」俺は今日の朝食は贅沢しないで、この前の報酬でもらった薬草を食べていた。（あ、ドレスシングとか無いからめっちゃ苦いよ）

そして俺は約束通り、重い足を動かし、ギルドへと向かった。

「もうー遅いー！」ハーブは約束時間まであと10分もあるのにギルドに来ていた。

もちろん、俺は周囲から冷たい視線を浴び続けている。

「は、早くいじうぜ・・・」こはダメだ！ そつそつて俺はハーブの腕を掴んでギルドを後にした。

ちなみに俺達が今向かっているのは、『ガルダス』という街だ。

その街はなんと言つても魔術書が大量に発行されている場所であり、初心者魔術から精霊などの扱う大技魔術、補助魔術・回復魔術など幅広いジャンルの魔術書が雑貨屋に置いてあるのだ。今日お金に余裕があったら買うことにしてよう。

・・・まあ、余裕があるとは思えないんだが・・・

さつきはらハーブは雑貨屋にある、ブレスレットばかり見ている。

ちなみに額は、3万メイル前後である。ありえないほど高い。

しかし、これだけ高いのには理由がある。

ここにあるブレスレットは、全て『魔法石』から形成されておるのだ。

ちなみに図鑑によると、魔法石というものは魔物の体で偶然できる石で、石には魔力が込められており、装備している者の魔力を増大させることができるものらしい。

あと、強い魔物であればあるほど魔法石に込められている魔力が大きくなるのだ。

もちろんその魔法石の方が値段が高いのだが……

「ヒロユキーこのブレスレットが欲しいんだけどおー」  
ハーブが指差したのは赤い魔法石でできたブレスレット。イグリュスの魔法石らしい。

値段は・・・4万メイル。一つ買うと7万メイルらしい。

「無理だ。そんなに俺も払えないわ！」俺はこればかりはキッパリと断る。

「・・・・ダメ？」またもやハーブの上目遣い。俺の心は一瞬揺らいだが、決意は変わらなかつた。

「ダメだ！」俺はもう一度断つた。

「ええーお願ひー」ハーブは俺に抱きついてきて言った。

その時に二つの柔らかいものが俺の肌に当たる。その瞬間俺の心は折れた。

「・・・しょうがないな。今回だけだぞ」・・・といつも言つてしまつた。

「やつたあー！じゃあ一つお願ひします」そうハーブは言つて、店員にブレスレットを渡した。

「ちょーーー！」ついでいいだろ！

「ダメだよー！」こいつらの方がお得だし！それに・・・

「それに？」俺は聞き返す。

「やつぱり・・・お揃いの方がいいもん！」ハーブは頬を赤くして言った。

その瞬間、俺の興奮ゲージがMAXへ到達し、危うく失神しそうになつた。

しかし、会計をすると同時に俺の興奮ゲージが〇にまで落ちた。

「お会計、7万メイルになります」

「・・・」俺は無言で大金を支払う。このお金渡す時間がとてつもなく辛い。

俺は金を支払い終えた後、雑貨屋を急いであとにした。もしこれ以上雑貨屋の中にいて、またハーブが欲しい物を見つけたらおしまいだからな。

「やつたあーー！ヒロユキとお揃いだーー！」ハーブはブレスレット

を腕につけていった。

もちろん俺も強制的にブレスレットをつけることになる。  
まあこれをつけることによって魔力が上がるから悪くは無いよね。

そんなこんなで俺は全財産の90%ちかくを失った。

しかし、その後もデートという名の金の無駄遣いは続いた。  
遊園地の中へ行き、クレープを食べたり、観覧車に乗つたりなどなど…

結局夕方になつた頃には、俺の全財産が4000メイルにまで減つていた。

「ヒロユキー今日はありがと!」ハーブはにっこり笑つて言った。  
その笑顔を見た瞬間、8万メイルの支出が屁でもないようと思えてしまつた。

「俺も楽しかつたよ。また今度行こうな。」もちろん、社交辞令だ。

「うん!・・・ヒロユキ、私言いたいことがあるのー。」

「ん?なんだ?」

「あ、あの・・・そ、それは・・・」ハーブの顔がだんだん真つ赤になつていぐ。

「どうした?熱でもあるのか?」やはり俺は恋愛経験0だ。  
後から考えてみると、自分でも有り得ないほど鈍感だな、って笑えてくる。

しかし、まだ俺はハーブの言おつとしていることがわかつていなかつたので、こんな簡単なことにも気付けなかつた。

「ヒロユキは、ハーブのことばつと思ひへ、ハーブは田をそらしながら言つてきた。

「普通に、好きかな」この時、俺はハーブのことを友達として好きと言つたんだ。

しかし、ハーブはそれを別の意味でとらえたらしい。

「ハーブをヒロユキのことがすき…だから付き合ってください…！」

「…え？」俺は聞き返した。

「いや、付き合つてほしいって言つてるだけだよ」ハーブの顔はまだ真っ赤だ。

「…ちょ、ちょいちょいちょい…え？罰ゲームかなんか？」

俺は思わず疑つた。それもそのはずであつ。

俺はルックスは中の下、頭はとてつもないバカ、運動音痴、恋愛経験0で、

自分のためなら手段を選ばないダメ人間の代表だぞ。それがこんな美少女を付き合える筈がない。

「ハーブはいつも本気だよ！ヒロユキは確かにブサイクだし、バカだし、鈍感だし、運動音痴だし、恋愛に対してもかなりのチキンだし…でも…」

頼む…もうやめてくれ！俺のガラスのハートがもうボロボロだ！

「でも…すつぐくやさしい人だと思う！だって7万メイルもするプレゼントを普通の人なら買わないよ？それにヒロユキは貴族なわ

けでもない、でもハーブのために買ってくれるなんて凄く嬉しかった。  
だからハーブはヒロユキのことが好きになつたんだ……どうかな  
？」

「わかつた……気持ちは嬉しいよ。でも、もう少し考えさせてく  
れないかな……」

俺は恋愛経験のだもん。本当にハーブを幸せにできるか……」

「……わかつた！じゃあ明日聞かせて！」ハーブはそう言つて走  
つて帰つてしまつた。

そりや恥ずかしかつただろうな。帰つちゃうのも当然だ。

「俺は……」俺は歩きながら考えていた。  
自分みたいなダメ人間にハーブを幸せにすることができるのか？  
自分みたいなダメ人間がハーブと付き合つてもいいのか？  
俺は、自分がダメ人間に生まれてきてしまったことに後悔した。  
もしも、ダメ人間じやなかつたら答えなんて迷わない。  
もしも、ダメ人間じやなかつたらハーブを苦しめることはない。  
もしも、ダメ人間じやなかたらこんなにも自分に落胆することもな  
い……

「やっぱり俺は……」氣付くと俺の家の前だつた。

そして、俺は決断をした。明日ハーブに本心を明かす。そう決めた。

目線：ハーブ

本当に告白しちゃつた……やっぱり恥ずかしかつたな。

きっとヒロユキはいきなり驚いてると想つ。そして、もの凄く悩んでいるんだと思う。

本当は言いたかったんだ。ヒロユキはダメ人間なんかじゃないって。ハーブがゴブリンの群れに襲われた時も、弱いくせに助けにきてくれた。

今日だって、ハーブを楽しませようと一生懸命だった。やつぱり、ヒロユキはすっごく優しいよ。そんなヒロユキが一番好きなんだ。

・・・・だから、明日またちゃんと返事してよね・・・

残高：8万4000メイル

収入：0メイル

支出：8万メイル

合計：4000メイル

## ダメ人間の恋愛初体験（後書き）

書いててハーブがかわいいと感じてしまった・・・  
感想・評価お待ちしています！

## ダメ人間の炎翼龍討伐～その1～（前書き）

今回は大型の魔物討伐の話です。

いい罷考えようとしたんだけど残金があれだつたんでパスします！

# ダメ人間の炎翼龍討伐／その1

目線  
；広幸

俺は今日、ハーブに自分の思いを伝えるつもりだ。

それからどんな結果にならなか  
後悔にしない  
それが俺の決めた道  
なのだから。

そして俺にはもう一つ重大なことがあつた。

どうやら俺のクエストの成績がなかなかいいらしく、上級魔物の討伐クエストを受ける権利が与えられたのだ。

うな恐ろしい魔物は討伐しない。

今回は、ギルドに入団したら絶対に超えなくてはならない壁である

ちなみに『炎翼龍』というのは、イグリコスの別名です。

このクエストをクリアすることにより、俺のギルドレベルが上がるらしい。

ちなみに今俺は1だ、1といひのは二フリン達を討伐する程度のクエストしか受けられない。

おー！

・・・ちょっと取り乱してしまった。しかし、このクエストをクリアすれば俺も2にあがれる。

そして今まで以上に収入も上がるというわけだ。これはおいしい話だね、うん。

あ、あとこのクエストには条件がついているらしい。

どうやら連れて行けるのは同じレベル以下の奴だけらしい。だから

俺が連れて行けるのは・・・

ハーブくらいであろう。もし一人でクエストクリアしたら、ハーブもレベルが2に上がれるらしい。

都合良く、ハーブはギルドにいた。

俺は一緒にクエストやらないか？（いきじ風）と言つてみた。

「やつたー！私もちょうど受けたかったんだけど・・・一人じゃ難しそうだつたからできなかつたの。

でもヒロユキと一緒にならうれしいな！・・・あ、あと昨日の返事を教えてね」

「ああ、分かつてゐるつて。このクエストが終わつたら俺の思いを言うから。」

俺は言い切つた。しかし、この言い方では死亡フラグが必然的に立つてしまふのだ。

そんなものへし折つてやるううう！・・・すまん、また取り乱した。

「じゃあクエスト行こうか。ちょっと準備してくるから待つてて」  
俺はハーブにそう言つて雑貨屋へと向かつた。

目線：ハーブ

今日は楽しみだな！ヒロユキとまたクエストに行けるなんて・・・

でも、一番樂しみなのはヒロコキの返事だよ。  
「あー早く帰つてこないかなー」私はそつとぶやきながらヒロコキ  
の帰りを待つていた。  
あらめないんだから。

田線・ヒロコキ

雑貨屋についた。しかし今の俺には軍資金がかなり少ない。とりあえず簡易罠にしようか。

「まずは・・・これとこれと・・・あ、あとこれが必要だな。」

俺は、瞬間接着剤（250メイル×4）と鋸びた鉄の剣（1000メイル×2）を買った。

それと、・・・を買った。これはまだ明らかにはしないでおこう。

ちなみに俺が鉄の剣を買った理由は、昔は友達と格闘したこともあって、

友達はなかなかお金持ちで、メリケンサック、プラスチック製のバットなどなど・・・

かなり高性能な武器を手にしていたんだが、俺にはそれを買える金もない。

その時に教室の一つのほうきを使って戦つていたんだが、その武器を手にした瞬間、

田頃運動音痴である俺がなぜかかなり俊敏になり、一番強くなってしまっていたのだ。

「けつこう重いけど、なんとかなるよな」俺は一つの剣を腰に下げ、再びギルドへと戻つていった。

俺がギルドに戻ると、ハーブは駆け寄つてきた。

「おかえりー 養は作れそつ？」

「戻つてこいつほどのもんじやないけどな・・・じゃあ行くか」俺達はギルドをあとにした。

「ふうー 到着」俺達は森林へと辿つた。

早速イグリュスを探し始める。イグリュスは森林の方にいる、とペスカは言つていた。

「じゃあ奥へと入つていくか」俺はハーブと共に森林の奥へと進んでいった。

すると目の前にゴブリンが現れた。ニヤニヤしていく気持ち悪い。

「こっちは任せでー！」ハーブは背中にかけていた太刀を取り出していた。

しかし、その時には俺は動き出していた。

「ふうん！」俺は一瞬でゴブリンの懷へと接近し、腰にかけている剣を抜いて斬りつけた。

「ゴブーーー！」ゴブリンを一撃で倒すことができた。・・・腕は落ちてないようだな。

「え？ ヒロコキにも特技つてあるの？」

「失礼な！俺にだつてできることは何個かあるぞー。例えば、一いつの剣を使いこなすこととか・・・・・・あとは・・・・・「ゴメン、やつぱ無いわ」俺は少しでも自分を誇ったことが恥ずかしかつた。

「だよね。でもめちゃめちゃ強いじゃんー。もう雑魚魔術なんて使わなくていいんじゃない？」

「そうだな。今度からは剣士で・・・・（フルルルルル）俺が職業を変えようとしたとき）、電話がかかってきた。

「魔術師からの転職は絶対許しませんよ。もしやつたらあなたの身分を奴隸に変えてしまますね」

それは、あのクソ魔術師からの脅迫であつた。

「わかつたよー。魔術師（たまに剣士）でもついてこくよー！」

「それもダメです。」

「いいじゃん！ EXILEでもボーカル兼パフォーマーの人いるじやん！」

パフォーマーはダンスする人のことです。

「む・・・・しようがないですね。許しましょう」

「そりゃどうも。じゃ、「俺は電話をきつた。

・ それにして魔術師さん・・・ビームから俺を見ているんですかね・・

ダメ人間の炎翼龍討伐～その一～（後書き）

残念ながらまだ戦いはしないのです・・・  
広幸にも特技があったとは・・・作者もビックリ！

## ダメ人間の炎翼龍討伐～その2～（前書き）

イグリュス討伐の続きです。

眠くて集中力が切れできました。

## ダメ人間の炎翼龍討伐～その2～

目線・広幸

俺は魔術師ロウとの電話を終え、イグリュスの搜索を再開した。先程から太陽の陽射しが強く、かなり暑くて汗が滝のように流れる。しかも周りは樹木に覆われていて熱が逃げづらく、めちゃめちゃむし暑い。

「ねービーにいるんだらう?」ハーブはビーフやら飽きてきたようだ。

「うへん・・・きつとビー」か日陰で休んでいたと思つよ。」

「なんで?」ハーブは俺に聞いてきた。

「だつて今日は炎天下だぞ。もし日向にいるとしたら太陽の熱でいいつの翼に引火したら大変だろ。」

しかも食事以外で無駄な体力を使うなんて思えないからな。」

「あ～なるほどね。じゃあ奇襲をかければいいね!」

「そうだな。でも見つけない限りには・・・」

俺が言葉を言い終わる前に、イグリュスを見つけてしまった。

大きな木の下の日陰で寝て いるイグリュスは森の王者とは思えなかつた。

そつ、なにが一番残念だったかと言つと、寝顔だ。

いつもは王者の風格あるつりしい顔だったが、寝顔はどこかの中年

のおっさんのようにだつた。

いびきはひるさく、顔は「マジかよ?」つてぐらい滑稽で、笑いを  
こらえるのが精一杯だった。

(ねえねえ、あれって本当にイグリュスなの?)

(うーん、ブサイクだけどそうだよな。とりあえず奇襲だ。ハーブ、  
あいつの首を斬つて来てくれないか?)

わかった。やつてみる) そうハーブは言って、ひつそりとイグリュ  
スの首元へと近づいていった。

ハーブは首の前に立つと、背中にかけていた太刀と鞘を腰へと移動  
させた。

そう、今からハーブは居合い斬りをやるのだ。  
居合い斬りは呼吸を整え集中力を高めて一撃に全力を注ぎ込む構え  
である。

もちろん、より強烈な一撃を繰り出すためにはかなりの集中力を必  
要とする。

更に相手にダメージを与えるなら、より高度な太刀をばさきも必要  
となるであろう。

「よく考えたら、初めてハーブの戦闘姿を見るかもしれないな」

そしてハーブは目を閉じながら、呼吸を整え始めた。だんだん息の  
音が聞こえなくなつてくる。

スペツ・・・

俺が気付いたときにはハーブはもう刀を抜いており、イグリュスの

首を斬っていた。

ハーブの一太刀はイグリュスの首をかなり深く斬つており、血が大量に吹き出している。

「グゲエエエエー！」イグリュスは痛みに絶叫しながらも立ち上がった。

さっきまでの滑稽な顔が嘘のように思えるほど、勇ましく威厳のある顔立ちへと変わった。

そしてイグリュスは自分の羽を首にくつつけた。・・・かなり器用なんだな。

さらに高速回転をし始める。すると、首についている羽が燃え始めた。

一見自殺行為をしているように見える。しかしこれは賢明な判断だ、と俺は思った。

（豆知識）

出血している時の応急処置として、傷口を火で焼くと出血が止まるのだ。

皆さんは聞いたことは無いだろうか。鼻血がよく出る人がたまに言うことがある。

「鼻を焼けば鼻血がでなくなるんだよ」と。

これは、鼻血をでなくさせるために鼻の中を火で焼くといつ処置らしい。

そんな俺の解説はさて置き、ひとつやらイグリュスの処置が終わったようだ。

イグリュスは空へと舞い上がり翼を大きく広げた。

「グヒヒヒヒヒー」イグリュスは羽を俺の方へ飛ばしてきた。

「ぐつ……」俺は避けきれなかつた炎をまとつた羽が俺の体へと突き刺さる。

「ヒロユキ！」ハーブは走ってきた。

「…………こいつは強敵だな……」俺は体に刺さつてゐる燃えている羽を抜きながら言った。

羽を抜くたびに激痛が走り、そこから血が流れ出す。とてもなく痛い。

「なら手つ取り早く罠を仕掛け始めるしかなさそうだな……」俺は瞬間接着剤と を取り出した。

それをハーブに持たせて作戦を説明をする。

「よし、ハーブ！どこか木に隠れるんだ！」

「分かつた！」俺はハーブが木に隠れたのを見計らい、イグリュスを挑発した。

「おい！お前の寝顔ブサイクなんだよ！みてて吐き気がしてくる

どうやら俺の挑発に気付いたらしく、かなりご立腹な様子。

「キヒヒヒエー！」空中で高速回転を始めたと思うと、翼が燃え始めた。

そしてそのまま俺の方へと突っ込んできた。

「よし！」俺はイグリュスをひきつけたまま、ハーブの隠れた木のほうへと走つていった。

「準備できたよー！」ハーブは木の陰から顔をだして言った。

「いける！今ならいける！よし！ハーブ、移動しとけ！」俺はハーブの隠れていた木の目の前まできた。

「キエエエエーー！」イグリュスは猛スピードで追いかけてきていた。

俺はイグリュスに直撃するギリギリで横へと回避した。

イグリュスが木に直撃する。すると同時にイグリュスはきにへばりついて動けなくなつた。

そう、イグリュスが激突した木には、大量の瞬間接着剤が塗られていたのだ。

ぶつかつた瞬間に瞬間接着剤にイグリュスがくっついて、動けなくなるというわけだ。

そしてここで今回の秘密兵器を投入しますか・・・

ハーブは手にしていた をイグリュスめがけてぶっかけた。

その瞬間、ものすごい大爆発が起こった。

ハーブがぶっかけたものとはそう、ガソリンだったのだ。

奴の体からでている炎で引火し、大爆発が起きたというわけです！

A H A H A H A H A !

・・・すまない、あまりにも爆発が大きかつたんで興奮してしまつた。

爆発で巻き上がつた煙が消える頃には、先程までいたはずのイグリュスが消えていた。

「え？まさか爆発で木つ端微塵になっちゃった？」

「違う！上！」ハーブが指を差した方には今までとは比べ物にならない程の炎を吹き出しているイグリュスがいた。

炎は今まで以上に澄んだ赤色をしており、全身を炎でまとった奴はこちらを睨みつけている。

「クエニーニーニーニー！」

その叫び声と共に、俺達と炎翼龍<sup>イグリュス</sup>の最期の死闘が始まった。

## ダメ人間の炎翼龍討伐～その2～（後書き）

まだひつぱります。

次でこのクエストは終了になりますので宜しくお願いします！

## ダメ人間の炎翼龍討伐～その3～（前書き）

戦いはこれで終了です。

しかし、まだやることが残っているのでその4を作りうと思います。

## ダメ人間の炎翼龍討伐／その3

俺達はイグリュスの動きを封じ、ガソリンという強力なアイテムを使つて確実に奴の息の根を止めたと思っていた。

しかし、そんなものは幻想にすぎなかつた。

奴は爆発で舞い上がつた煙の中から再び颯爽さっそうと現れた。

奴の全身は煌びやかな炎がまとつており、顔立ちは先程の寝顔を忘れさせるような、怒りに満ち溢れた顔になつていた。果たして、戦いはどうなるのか！？・・・次話につづく

「まだ終わらねえよ！てか始まつて200文字くらいしかたつてないだろ！」

おい作者！適当に話数を増やそうとしても許さないからな！」

俺は天から聞こえるナレーション的なものにツッコミを入れた。

「さてと、もつ罷は使つちゃつたからな。どうやら剣で戦うしかなさそうだ」

俺は腰にかけている二つの剣を抜きだし、空にいるイグリュスのほうに構えた。

「ハーブ！一気にしかけるぞ！」俺が言つと同時に、ハーブ太刀を構えた。

「うおおおおおおー！」俺はイグリュスのほうへとジャンプする。  
・・・肝心な事を忘れていた。

あくまで俺は剣の扱いが上手いだけであって、身体能力はダメなんだつた。

当然、ジャンプはイグリュスに届くはずも無い。30cmくらいしか飛べなかつた。

「うわー。ヒロユキかつこ悪いー」ハーブの冷ややかな視線が痛い。

「ぐつ！今のは見なかつたことにしてくれ！」

俺がハーブにお願いしていると、イグリュスは空からダイブしてきました。

「グエニエー！」大きく広げた翼に俺は直撃した。

「痛ッ！熱ッ！」俺は一瞬で地面に叩きつけられてしまった。  
・・・リアクションが薄いことにはかまわないでください。

「ヒロユキ！・・・よくも！」ハーブは怒りで顔を歪め、イグリュスの左翼を斬りつけた。

「グエニエー！」イグリュスは翼を斬られたことに激怒し、ハーブを吹つ飛ばした。

「ハーブ！」俺はなんとか立ち上がり、吹き飛ばされたハーブの方へと走つていく。

ハーブはどうやら氣絶しているようだ。これでは戦えるのは俺だけであるつ。

「やはり、俺のよつなダメ人間では無理なのか……」「俺はクエストを諦めようと考えた。

しかし、俺はハーブに言われた言葉を思い出した。

（ヒロユキは確かにブサイクだし、バカだし、鈍感だし、運動音痴だし、恋愛に対してかなりのチキンだし……でも……すつごくやさしい人だと思う！）

「やさしい人……か」俺は腕につけているブレスレットを見てつぶやいた。

そして俺は決意した。

「おい、寝顔ブサイク！今俺はハーブにプレゼントを無理矢理買わされて金欠なんだよ！」

お前をぶつ潰して金を荒稼ぎしてやる！俺は再び剣を構え、奴の懐へと潜り込む。

「グエニニニ！？」奴は燃えさかる翼で俺に攻撃してきた。

「ふつ。双剣を手にした俺はダメ人間じやないんだよおおおおおおおおお！」

俺は翼を華麗に交わし、奴の腹に剣を振りかざした。

「グワアアアアア！！」イグリュスの腹から血が飛び散り、それをこらえながらも奴は空へと舞い上がった。

「……そついえばあと一つだけいい作戦があるかも知れないな」俺はあることを思い出し、ある場所へと走り出した。

そう、今俺が向かっている場所は、この前俺がゴブリンの討伐クエ

ストを受けたときに罠を仕掛けた場所だ。

もし運がよければ、ピアノ線が残っているかもしれない。

俺はイグリュスの空から羽を飛ばしてくる攻撃を避けながら罠のあつた場所へと走つていった。

「あつた！」俺はピアノ線を見つけることができた。  
それを急いで掴み、剣の持ち手に結びつける。

二つの剣はピアノ線によつて繋がつた。これでさうとした武器の完成だ。

「グエエエエー！」イグリュスは空中にいる。これはいいチャンスだ。

「喰らえええええ！」俺は片方の剣をイグリュスへと投げつける。

イグリュスは軽く剣を避けた。そして馬鹿にしているような顔でこつちを見てきた。

「お前の方がバカだよ！」俺は手元にある剣を大きく振つた。  
すると、先程イグリュスが避けた剣の軌道がずれ、剣についているピアノ線が奴の体に巻きついた。

「グエ？」奴はまだ事態を理解していないようだ。

「うおおおおおお！」俺は渾身の力で手元にある剣を引っ張る。  
すると、イグリュスが徐々に地面へと近づいてきた。まさに縄引き状態だ。

「グエエエエエー！」「イグリュスも必死に抵抗する。もちろん、俺の筋力ではイグリュスを引き上げることは不可能だつた。

しかし、俺は違うことを狙つていた。

イグリュスが抵抗してくれたおかげで、ピアノ線が奴の体を切り刻む。

イグリュスはうめき声を上げている。だいぶ弱つてきているようだ。

「氷の精靈よ、我的体にその力を示せ！－アイスピニア！」

俺は右手に氷の棘を作り出す。今までにはつらら程度の雑魚魔法だつた。

しかし、魔法石を装備し、魔物を倒してきた俺の魔力は以前よりもはるかに上がつていた。

形成されたのはつらら程度のサイズだった。

しかし、それが10本くらい形成された。これも魔力が上がつたらであろう。

「死ねえええ！」俺はイグリュスめがけて投げつけた。

6本くらいは奴の炎で解けてしまった。しかし、残りの4本がハーブが斬りつけた傷口へと突き刺さる。

今までではスライムにも突き刺すことができなかつたが、今回はイグリュスに刺さつた。

「グギヤアアアー！」つららが奴の傷口をえぐり、とうとう奴は力尽きた。

ドサツ、と地面にイグリュスが落ちる。そう、俺達は森の王者に勝利したのだ！

「やつた！・・・（ドサッ）」

しかし、俺にも起きているほどの体力も無く、そのまま気絶してしまった。

目線：魔術師ロウ

「おお、どうやら炎翼龍に勝利したようですね。」

やはり彼は凄い実力を持っているようだ。  
あれだけの貧弱魔法と劣化した武器で倒すとは・・・彼の実力も計り知れませんね。

「さてと、あのまま倒れたまでは可哀想ですし・・・ちょっと転移魔法を使ってあげましょっか。」

私は指を噛み切り、地面に巨大な魔方陣を書き始めた。

「これでよしつと」私が魔方陣を書き終えると同時に魔方陣は光を放つ。

そして、その魔方陣の中に広幸君と彼の彼女さん？と討伐したイグリュスが現れた。

「田を覚ましたらきっと驚きますね～楽しみです。」

彼達が田を覚ますまで、魔物討伐でもしてきましょうか。

## ダメ人間の炎翼龍討伐～その3～（後書き）

主人公の魔力をもう少し上げたほうがいいのかな・・・  
感想・指摘お待ちしています！

ダメ人間の炎翼龍討伐～その4～（前書き）

今回は広幸の気持ちを伝える話です。

## ダメ人間の炎翼龍討伐／その4

目線：広幸

俺は田を覚ました。すると、周りの景色が違うことに気付いた。

「あら、気付きましたか？」そこに立っていたのは魔術師であった。魔術師の横には顔が2つあり、犬のような顔立ちで、大きな翼を持ち、藍色の毛で体を覆っている赤い眼の獣が倒れていた。

「あのー、それ何？」

「ああ、これですか。これは『オルトロス』ですよ。」

（図鑑データ）

オルトロス 別名：式顔獣 産物：式顔獣のアギト

ギリシャ神話で語られている一つの顔を持つ犬です。ギリシャ神話では落ち着きの無い性格として語られているが、こちらの世界のオルトロスは理性を持っている。しかし、かなり凶暴な魔物。

「まあギルドレベルが4くらい無いと戦うことは無いでしょう。しかし那个分だけあって報酬はかなり高額ですよ。広幸君、あなたも受けてみてはどうですか？」

「絶対嫌だよ！死んじゃつもん！」俺は断固拒否した。

「まあ抱むのは無理もないでしょう。それより体の傷は治りましたか？」

「ん？ 傷が治ってる・・・」俺はからだを見たが傷は無く、痛こというも無かつた。

「ふふふ、ひょっと回復魔法を使いましたからね。」

「ありがとうございますー！ てかその魔法教えてください～～～

俺はハーブから醫師した上目遣いを使ってみた。

「なんですか気持ち悪い。」

効果のだった。なんかすごい恥ずかしいんだけど。

「まあ教えてあげてもいいでしょ。あなたはひょっと弱すぎますもんね。ある程度の魔力はつけてあげようと思っています。チートまでは行きませんけど」

「本当ですかー？」

「しかしあなたが修行について来れたらですけどね」

「なんでもやりますからー！」俺にも唯一の希望が見えてきた。

「じゃあしばりへの間はいつまでもりこます。」

今からあなたとイグリコスとそこで倒れているあなたの彼女さんを一度、ギルドに転送させますから。

ハーブとともに一皿お別れを告げて置いてください。」「

「……わかりました」ハーブと一緒に離れなくてはいけないのか。俺はそう考えると切なくなってきた。あいつも嫌だつて言つかもしれないな……

「じゃあ行きますよー」魔術師は指を噛み切り、自分の血で床に魔方陣を書き始める。

「早く入ってください」そう言われたので、俺はハーブを担いで魔方陣の中に入った。

その後に魔術師ロウはイグリュスの周りにも魔方陣を書き始めた。

「それでは」魔術師が指をパチンと鳴らすと同時に、魔方陣が光りだす。

俺達は光の中に吸い込まれていった。

「やつと田を覚ましたか」

俺が目を覚ますと、ギルドマスターのフレアがいた。

「いきなりイグリュスとハーブと共にギルドの玄関に現れてビビッつたぞ。」

「ああ、魔術師ロウさんに転送してもらつたんですよ。」

「なるほどな。確かにあの上級転送魔法が使えるのはロウくらいだろうしな」

(そんなにあの魔術師は強かつたのか……)

「それよりこれが今回の報酬だ。」俺はフレアから茶封筒を渡された。

基本報酬：3万メイル

産物報酬：炎翼龍の魔法石×2（4万メイル）

物品報酬：炎翼龍チケット×4

「すいません、この炎翼龍チケットってなんですか？」

「ああ、魔物を倒したときにもらえるチケットだ。

素材を渡すのは面倒なんでな。そのチケットを何枚か集めて鍛冶屋とかに行くと

武器を強化してもらえたり、金に換金してもらえたりするんだ。」

「なるほど、ありがとうございます。では「俺はギルドを後にしようとしました。

「あー。ハーブがお前のことを外で待っていたぞ！」

「わかりました。行つてみます。」

そういうえばまだ俺の気持ちを伝えて無かったよな。

俺は外に出た。そこにはハーブが待っていた。

「ヒロユキ！もう大丈夫なの？」

「ああ、傷はなんともないよ。ハーブは大丈夫？」

「うん！目が覚めたら治つてた！」

そつか。ハーブは魔術師のことを知らないもんな。

「そうだ。はい、これ報酬」「俺は報酬の半分である3万5000メイルを渡した。

「こんなものよりもっと欲しいものがあるんだけど・・・」  
ハーブは報酬を受けとりながらもモジモジしながら言った。

「ああ、そうだったな。俺の気持ちを言わないと・・・」

「どう?」ハーブは目をそらしながら言った。

「・・・」「めん。やっぱ俺にはハーブを幸せにすることは無理だよ。

気持ちは凄く嬉しかったけどハーブには俺なんかよりもっとといい人がいると思う。

もしも俺がもつと強くていい人間になれた時には俺から告白するから・・・

「・・・わかった。じゃあね！」

ハーブは俺に一度も目を合わせることが無く走って帰ってしまった。  
なぜだろうか、ハーブの声は震えていた。

やつぱり俺みたいな男が「付き合って」なんて言えない・・・  
もし付き合つたとしても明日からこの街から離れるなんてもつと言えない・・・

「いやそりいなくなるのも悪いけど、しょうがないよな・・・」

俺が出した結論に後悔はない。

でもなぜだらう、さつきから涙が止まらないや……

### 目線：ハーブ

大好きな人に振られてしまった。

でもヒロユキがこれでいいならいいんだよね……

私もちゃんとヒロユキのこと諦めなきゃ。

でも、ヒロユキは嘘をついていた。

「明日からは普通に接していくかな……」  
やつぱり私は諦めない。何度も、しつこくたつて諦めないんだ  
から！

第一章／ダメ人間の異世界転生／完

残高：	40000メイル
収入：	3万5000メイル
支出：	3000メイル
合計：	3万6000メイル



## ダメ人間の炎翼龍討伐～その4～（後書き）

これで第一章が終わります。  
ちょっと短かつたと思いますが  
第二章が始まる予定です。  
内容は、広幸が若干チート化するまでのお話です。

## ダメ人間のスバルタ修行（前書き）

第二章「ダメ人間チート化！？」の始まりです。  
果たして広幸はチート化することができるのでしょうか？

## ダメ人間のスバルタ修行

目線・広幸

朝だ。俺は今日からこの街を離れなくてはならない。ハーブにはちゃんと俺の気持ちを伝えたし、もつ何も悔いは残っていない。

「さてと、長い修行になりそうだ。ちょっと準備をしていくか」俺は鍛冶屋へと向かった。

「あいよー。いらっしゃいー！」

「あのー。この鎧びた鉄剣を強化したいんだけど。」

「あいよー。じゃあチケットを渡してくれないかい！」

「はい。」俺は炎翼龍のチケットを2枚差し出した。

「なるほど・・・これなら『フレイムツインソード』くらいが作れるぞー！」

「ああ、任せた。・・・剣なんてわかんねーよ。なんでもいいから早く作ってくれ！」

「じゃあちよつと待つとけよなー。」そう言つて鍛冶屋のおじさんは奥の工房へ入つていった。

（2時間後）

「はいよー！完成だ！」おじさんはドヤ顔をしながら現れた。  
おじさんが手にしていたのは、先程までの鋸びついた剣とは思えない美しい剣であった。

剣は薄い赤色をしており、金属特有の光沢を放つていて、炎翼龍の名にふさわしかった。

「おお、これは随分と美しい剣になつたな！」

「こやこや、あんちゃん！」の剣を振つてみると凄さがもつとわかるよー！」

俺はおじさんに剣を渡された。ちよつと振つてみると、

かなり軽量化されたようだ。これなら筋肉痛にもならずに済みそうだ。  
しかし、それ以上に素晴らしいのは剣の能力である。

振つたら剣の刃が炎をまとつ。これも炎翼龍の素材を使つたからなのである。

「どうだい？かなりいい武器だらう？」「おじさんはまだドヤ顔をしている。

なんだか凄く腹が立つが、本当に素晴らしい武器なので許しておこう。

「ああ、ありがとう。じゃ、俺は店を後にしようとした。

「ちょいちょいちょいちょい！あんちゃん、金払つてないよー」おじさんが止める。

「え？ チケットだけじゃダメなの？」

「そ、うだよ！ はい、じゃあ2万メイル払つてね！」

ぐ・・・最悪だ。結構な高額じゃないかああああああああああああああ

「…後払いで、俺は猛ダッシュで店から逃走した。

卷之三

おじさんは前に突き出た大きな腹をゆこせゆこせと揺らしながら俺を追いかけてくる。

俺は忘れていた。自分がポツチャリ系の中一人との速さが変わらないことを・・・

「ハハヤああああああああ！」俺は捕まってしまった。

「あんちゃん、なんで逃げたんだ？」  
俺は拷問されていた。

「いや、ちょっとお金を払いたくなかったもので・・・」めんなさ

い！」俺は土下座した。

「ふざけんなー。そんなんで許してもいいべねと思つたかー。」

「ちやんとお金は払っておかから・・・」俺はお金を取り出した。

「今日は3万メイルで許してやるからなー。ありがたく思えー。」

「・・・あの、お金1.5倍に増えてません?」

「うべいべいべいなー。いいから払え!」

「ひいいいいー! 僕はおじさんのお脅迫に心が折れ、3万メイルを支払った。

「よしー! ジャあもう帰つていいぞ。僕は今から余計に貰つた1万メイルでパチン! をしてくる!」

~心の声~

ふざけやがつて! 僕の貴重な1万メイルをなんだと思つてやがる!  
中年太りの分際で! 潰す! 潰す! TU BU SU ! HAHAH  
AHHH!!

しかし、ひとなことが言えるわけも無く、僕は渋々鍛冶屋を後にしてた。

「さてと、武器も置つたわけだし・・・魔術師のところに行くか折れは魔術師に電話した。

「もしもしー。うちら魔術師ロウのハンバーガーショップ本店です。

」

「なんでだよ! どんな副業してんだよー! 僕はいきなりの出来事に驚きながらも正確にツッコんだ。

「ああ、これはちょっと趣味でやつてるだけですよ。」

「どんな趣味してんだよー。」

「それよつ、ちゃんとイメージキャラクターもあるんですよ。  
名前はロウネル・サンダース君って言つんですよ。」

「おーー！それカールおじさんのがパクリじゃねーか！  
しかもケンシキーだから！ハンバーガーじゃないからーせめてド  
ナーダにしてけよー。」

「なかなかツシミが上手ですね。魔術師じゃ無くてツシミが上  
手で職業変更したうぢうですか？」

「どんな職業だよー戦えねえよー。」

「それよつ、もうコチラへ来る準備は整いましたか？」

「ああ、だから電話したんだ」

「じゃあ今から転送しますね。行きますよー。」

魔術師がそう言つと、俺の足元に魔方陣が出来上がり、光を放つ。  
そして俺は光の中へと吸い込まれた。

「早く起きてくれださーー」俺が目を覚ますとそこには魔術師がいた。

「さてと。じゃあ急なんですが、あなたを未開の地へと転送します  
ね。」

「未開の地？」

「そうです。この世界ではまだ私達のような人族の住んでいないような場所があります。

そこにはブルースライムのような低級魔物からオルトロスのような上級魔物まで、

たくさんの種類の魔物がつよいります。そこで魔物を倒してきてください。

全部で3つの場所にわかっているのですが、場所によつて魔物の強さが変わります。

最初は推奨ギルドレベル1～2で、次は3～4、最後の場所は5です。

魔力は魔物を倒してあげるのが手っ取り早いので効率よく上がりますよ。

あ、死んじやつたらそれでおしまいですけどね。」

「なんですか？師匠の回復魔術で治せるんじや・・・」

「古くから、死者を生き返らせる『黒魔術』の記載された魔術書は封印されました。

だから私にも死者を復活させることはできないのです。

まあ、瀕死状態の時なら転生くらいはできますけどね。では話を続けます。

せっかく魔物を倒したとしても、報酬金が貰えないなら嬉しくないですよね？」

「もちろんですよー俺は金稼ぎ以外には目的なんて無いんですから！」

「そ・こ・で！あなたの倒した魔物は私がギルドに転送します。

そして手に入つた報酬をあなたに渡そうと思います。これで文句な

いですね？」

「あつがとつりじゃこます……あ、でもお願いがあるんですけど」

「何ですか？まさかロウネル・サンダース君人形をくださいとか？」  
「ちづーよ……できれば俺が修行していることは誰にも言わないでくれませんか？」

「なぜですか？」

「実はハーブに街を離れることを言わずにきたんです。

きっと俺がどこか遠くで魔物と戦つてるなんていつたら一緒に来るって言うと思います。

あと、心配はかけたくないんですけどから、誰にも言わないでください！」

「……わかりました。かわいい教え子の頼みですもんね。

なんとかしましょ。なら彼女さんのためにも早く修行を終わらせないといけませんね」

「まだ付き合つてしませんよ……でも修行が終わつて街に戻つたら告白しようと思ひます。」

「フフフ、それは楽しみですね。じゃあ早く転送しちゃいましょうか。」

魔術師は魔方陣を書き始めた。今回は今まで以上に複雑な形の魔方陣だ。

俺は魔方陣の中へと入った。

「それでは、頑張ってください～」

魔方陣が光を放ち、俺は光の中へと消えていった。

・・・これから俺の修行が始まるのだ

目線：魔術師ロウ

彼には心底驚かされましたよ。まさか、ハーブさんに内緒で来ると  
は思いませんでした。

しかし、彼の覚悟はよく伝わりました。

転生前から随分と変わりましたね。もう彼はダメ人間なんかじゃな  
い。

彼は金稼ぎのためだけにこの修行を受けたのではないのではじょ  
う。きっとハーブさんを守るために力が欲しかったのですね。

まあ、愛の力はどこまで通用するのでしょうか楽しみですね。  
私の予想では、修行を終えるまで10年はかかると思います。

・・・私ですら20年かかったのですからね。

残高：	3万6000メイル
収入：	0メイル
支出：	3万メイル

合計：

6  
0  
0  
0  
メ  
イ  
ル

## ダメ人間のスバルタ修行（後書き）

あの魔術師でさえ20年かかったから  
ダメ人間はかなりの時間がかかることでしょう。  
まあのんびりと書いていくので宜しくお願ひします。w

## ダメ人間の牙狼獣討伐（前書き）

今回は新しい魔物を登場させました。

## ダメ人間の牙狼獣討伐

目線：広幸

「…………」が、未開の地か？」

俺が目を覚ましたところは大きな草原であった。かなり見晴らしがよく、魔物に見つかったら逃げるのは困難である。

その時、電話が鳴った。

「もしもしー。つきましたか？」

「はい、かなり見晴らしのいい草原につきましたよ。」

「そこは、未開の地の一つである『グラル草原』ですよ。あ、言い忘れていましたけど、フレアさんにはあなたが修行中のことを言つちやいました！」

「なんですか！？」

「フレアさんから、クエストをだしてもらえるようにするためです。これであなたが未開の地の魔物を討伐すると、ギルドレベルも上がるというわけですよ。」

「なるほど。まあ嬉しいですけど……」

「大丈夫です。フレアさんは口止めしききましたから。もし言つたら、あの人の脳みそを破壊する魔法でも使つちやいますんで」

「そこまでしなくていいです！！」

あの魔術師はそんな極悪魔法まで使えるのか・・・

「じゃあ早速ですが、クエストがでていますよ。

今回討伐してもらいたいのは『牙狼獸』です。」

### （図鑑データ）

牙狼獸 別名：ガルロス 産物：瑠璃色の牙

ガルロスは瑠璃色の鋭利な牙を持つ狼の魔物。  
スピードはそれなりに速く、獲物を仕留めるために発達した牙で攻  
撃してくる。

「ガルロスはイグリュスよりも弱いですから、あなたなら倒せるで  
しょう。

今回の報酬は、

基本報酬：80000メイル

産物報酬：1個×40000メイル

物品報酬：牙狼獸チケット×3

ですよ。」

「まあとつととそのガルロスを討伐すればいいんだろ？いつてくる  
よ」

「頑張つてくださいね」

俺は電話をきつた後、ガルロス搜索を始めた。

「でも一体どこにいるんだよ・・・」

周りを見てもブルースライムやゴブリンくらいしかいない。

「とりあえずこいつらでも討伐しておくか」

俺は腰にかけている剣を構えた。そして、目の前にいたスライムを斬る。

「グギギ！・・・」どうやら一撃で倒せたようだ。

やっぱり俺には剣士のほうが向いているような気がする。

そう思いながら俺は剣を腰にかけた。

「次は魔術でも使ってみるか。

炎の精霊よ、我的体にその力を示せ！イナズマアロー！」

右手に雷の矢が形成された。俺は矢をブルースライムめがけて投げる。

矢はスライムに当たると同時に放電した。

「ギルギガ！！」

一撃で倒せはしなかつたが、かなりのダメージを与えることができた。

これも、この前のイグリュスの戦闘で魔力が上がったからだろう。

「よし、炎の精霊よ、我的体にその力を示せ！ファイアボール！」

俺の右腕に炎の球が出来上がる。

その球を瀕死のブルースライムに投げつける。

「グギギ！・・・」炎はスライムの体を焼き滅ぼした。

もう俺の炎はチャーハンを炊けるくらいまでに成長しており、スライムはプルプルした灰になった。・・・気持ち悪い。

「まあこんなところだよな。じゃあガルロスを探すか。」

俺は周りの搜索を続ける。すると俺の足元の地面が盛り上がった。

「何だ！？」俺が気付いたときには遅かった。

そう、ガルロスが地面に潜んでいて、地面から牙攻撃を仕掛けてきたのだ。

「ぐはああ！！」俺は地面からでてきた鋭利な牙に足をやられた。しかし、俺は素早く腰の剣を抜いて、牙の出てきた地面に突き刺した。

「ガルウウウア！！」地面から悲鳴が聞こえた。

そして、地面から大きくて鋭利な瑠璃色の牙を持つ、『牙狼獸』が現れたのだ。

「ガルル！」奴は俺に突進してきた。今までの魔物よりも速い。俺の目の前で、ガルロスは一瞬沈み込み、牙をアップバーするように突き上げてきた。

「うおつと！」

俺はギリギリで突きあがってきた牙を避けた。そのまま剣で奴を斬る。

しかし奴も俺の振りかざした剣が当たる前にバックステップして避けた。

「こいつは中々手強そうだ・・・」しかし、俺には先程思いついた新しい作戦があつた。

「炎の精靈よ、我的剣にその身を宿せ！フレイムソード！」

俺の手からでてきた炎は、剣の周りを覆つた。

そう、魔法を武器に使つたのだ。

元々が炎属性の俺の剣に更に炎を追加することにより、強力な武器に変わつた。

「ガルル・・・」ガルロスは2本の牙をこちらに向けて威嚇している。

「うおおおおお！」俺は剣を大きく振つた。

もちろん、この剣のリー・チでは届くはずも無い。

しかし、俺が狙つていたのは剣で奴を斬ることではなかつた。

振ると同時に、剣から炎の球がガルロスの方へと放たれた。この剣を覆つてている炎と、この剣から出る炎が飛び出したのだ。

「ガルル！」不意をつかれたガルロスは避けることもできず、炎の球に直撃した。

そして、ガルロスは吹き飛んだ。しかし、俺は追い討ちをかける。

「もう一発！」俺はもう片方の剣を振つた。

剣から炎の球が放たれ、吹き飛ばされたガルロスに直撃した。

「キヤン！」犬のような悲鳴を上げて、ガルロスは地面に倒れた。

「やつたのか？・・・」俺は産物を回収するために近づいた。

「ガルルガ！」するといきなりガルロスが立ち上がり、俺に牙を刺してきた。

「あがあ！」俺の腹に牙が刺さる。傷口から血が飛び散る。でもここで負けるわけにはいかない。

俺は最後の力を振り絞り、奴の首元に剣を突き刺した。

「ガ・ル・・・」首から大量の血が飛び散り、ガルロスは倒れた。

「終わった・・・」俺はそつと突き刺さった牙を抜いて、魔術師に電話した。

「・・・もしもし、倒し終わりましたよ・・・」

「あーお疲れ様です。じゃあ魔物はフレアに渡しておきますね。」

「はい・・・お願いします・・・」

それと同時に、俺の横に倒れていたガルロスが魔方陣に吸い込まれ、消えていった。

「今回の報酬の、

基本報酬：80000メイル

産物報酬：瑠璃色の牙×2 80000メイル

物品報酬：牙狼獣チケット×3

はあなたの家のポストに送つておきますね。

あ、あとかなり傷ついてるっぽいですね。じゃあせっかくですし回復魔法を教えましょうか

「本当ですか！？」

残高：  
6 0 0 0 メイル  
収入： 1 万 6 0 0 0 メイル  
支出： 0 メイル

合計：2 万 2 0 0 0 メイル

## ダメ人間の牙狼獣討伐（後書き）

だんだん書いてるうちにチート化してきたし・・・  
ちょっと抑え目でいきましょうかねw

## ダメ人間の回復魔法（前書き）

今回は新しい魔術を覚える話です。

## ダメ人間の回復魔法

目線・広幸

「本当に回復魔法をおしえてくれるんですかーー?」

「ええ、この先必要不可欠でしょう。では、そちらに魔術書を送るのでそれを見て習得してください。」

電話がきると同時に、魔方陣が現れ、そこから一冊の魔術書が現れた。

「これは・・・『ヒールリング』?」

魔術書には、『ヒールリング』と書かれている。

俺は魔術書を読み始めた。たくさんの文章が書かれている。

### 1・ヒールリングの効果

魔力をあまり必要としない初級回復魔術。

回復量は他の魔法に比べて少ないが、ある程度の傷は治すことができる。

傷口を塞いだり、体の疲労の軽減させるなどの応急処置に使われやすい。

### 2・ヒールリングの発動方法

習得には標準の魔術者でも3日はかかる。

まずははじめに、魔力が血液中を流れていることを想像する。こつすることで、実際に魔力が血液中を回りはじめる。

次に、その魔力が手に溜まつていいくことを想像する。

「つする」とで血液が流れながら、手に集まつていいく。

最後に、傷口に魔力を溜めた手をかざす。

すると、手から魔力によつて形成された輪が出来上がる。その輪が傷口の周りに近づくと、自然治癒能力が高まって回復し始めるのだ。

「なるほど……」うか？」俺は血液中に魔力が流れることを想像し始めた。

心臓から魔力が血液と共に流れしていくを感じる。

だんだん体が熱くなつていく。それと同時に傷口の痛みが多少だが和らいだ気がした。

そのまま俺はその魔力が右手に溜まつていくことを想像する。ドクドク、という血液が流れる感覚を感覚を感じながら、右手へと意識を高めた。

だんだんと体の熱さが無くなつてきた。

その代わりに右手がどんどん熱くなつていくのを感じた。

しかし、それと同時に傷口の痛みを激しく感じた。

「ぐつ！」俺はあまりの痛みに耐え切れず、意識を傷口へと集中させてしまった。

その瞬間に手の熱くなる感覚は消えてしまった。

「魔術失敗か……」俺は本当にこんな集中力を使う魔術ができるのか、と思つてしまつた。

しかし、俺には集中力だけには自信がある。

「あんなブラック会社でさんざん重労働させられてきたんだ！」「なんくらいのあの極悪な仕事に比べたら簡単だ！」

『気を取り直して俺は『ヒールリング』の練習を始めた。

「30分後」

「・・・・・だめだ・・・・・もう少しなの・・・・・」

俺はなんとか痛みをこらえて、右手に輪を布つ出すことはできた。しかし、その後に傷口に輪を近づけるとまた少しのどきりで輪が壊れてしまうのだ。

「やつぱりなにかが足りないのか・・・・・」

俺は再び魔術書を開いた。魔術書は300ページ近くも長々と文章が書いてある。

しかし、魔術の習得に関係なさそうなことが書いていたりするのだが、

俺は一度全ての文章を読み直していた。

すると、ある言葉に引っかかった。

『美しい女王の、緑の腕輪を創りして、その輪がざさん時、傷を癒さん。』

輪壊れし時、魔法石で輪を創らん。されば傷癒す輪できん。  
また魔術とは、月が創り、太陽が壊す。』

とりあえず、ヒールリングで輪を作ったらいつにかざすと傷が治る。もし壊れたときは、魔法石で輪を作れば傷を癒すことができる、といつことはわかつた。

しかし、魔法石に意識を高め、魔力を溜めよつとしているんだが、全く輪がない。

更にわからないことは、『美しき女王』のことだ。この魔術を創りだした人だとは思うのだが、それに関しての内容が魔術書に書いていないのだ。

きっと最後の『月が創り、太陽が壊す』にも何か関係があるのであります。

「でもおかしいな。魔術は太陽が出ていても使えるんだけど……」俺は頭を悩ませていた。じうじうする間にも傷口の出血は止まらない。

その時、もう一つの不可解な点に気が付いた。

そう、最後の1ページだけが真っ白なのだ。ざっと目を通しただけでは気にならなかつたのだが、今見るとなんだが不自然だ。

前のページの文章が途中で終わっているのだ。しかし、その続きは書いていない。

その時、魔術師から電話があつた。

「どうですか？ 魔術は覚えられましたか？」

「いえ、いいところまでいくんですけど、輪が壊れちゃうんですよ。

・・・

「やはり、そこで手間取っているところでしたか。」

「すいません、ちょっと質問があるんですけど・・・」

「なんですか？まさか、ロウネル・サンダ……」

「ちげーよー。どんだけ引きずつてんだよ……いや、ちよつとかしいんですよ」

「なにがですか？」

「ちよつと不自然なんですね。あの『魔術書』……」

「ほつ・・・ビージーですか？」

「最後のページだけ、何故か空白なんですよ。普通なら氣にならないんですけど・・・」

前の文章が途中で切れているんですね。そこで質問なんんですけど、何か条件を満たさないと封印が解けないようになっている魔術とかつてありますかね？」

「ああ、古の封印魔法とやらを聞いたことがありますよ。昔はそうやって魔術の内容を守つてきました」

例えば、水をかけたら文章が浮かび上がるとか・・・でも、必ず魔術書にヒントが隠されているんですよねー。まあ頑張つてください」

「わかりました。ありがとうございます」

俺は電話をきつた後、あの文章を思い出した。

『美しき女王の、緑の腕輪を創りして、その輪かざさん時、傷を癒さん。

輪壊れし時、魔法石で輪を創らん。されば傷癒す輪できん。

また魔術とは、月が創り、太陽が壊す。

この文章にヒントがある？

「そうか！！この封印魔術を解く方法は、太陽に当てるんだ！！」俺は気付いた。この封印魔術は太陽の光によつて解かれることを。

そして俺は真っ白な最後のページを開き、太陽の光を当てた。

そこに書かれていたのは、女王のことと、魔術の真理であった。

アーノルドの女王。二の魔術を創り出した人物。

彼女は世界初の回復魔法を創り出した。

この魔術は簡単に轉じて、それはきかない

九〇

その時に輪を倉り出した手の人差し指で輪を描くのた

ନେହି

この魔術書を読みてゐるだけ 一度は見たはずだ

『輪壊れし時、魔法石で輪を創らん。されば傷癒す輪できん。』

アリドネの女王は、魔力が非常に少なかつたと言われている。

しかし、強力な魔物を國中の耆達総動員で倒せよ。

手にしたのだ。

その魔法石は指輪になつておひ  
人差し指につけてしまひし

術を発動する際に

人差し指を使わないとできないよつこしたのである。これが、『魔法石で輪を創らん。』の意味である。

「なるほど。ならこいつすれば・・・」

俺はもう一度右手に意識を集中させ、輪をつくつた。そして、それを傷口に近づけると壊れてしまった。

その時、右手の人差し指で輪を描いてみた。

すると、緑色の輪ができ始めた。それを傷口に当ててみると、だんだん傷口の痛みが無くなつていき、2分もすれば傷が完璧に治つた。

「よっしゃあああああああ！」

俺は新たに、『ヒールリング』を覚えたのだった。

目線：魔術師ロウ

やはり彼の頭の良さには驚かされますね。

あの謎めいた文章を解読するとは・・・正直驚きました。

「この先あの魔術は大変役に立ちますよ・・・広幸君」  
だって次の魔物はイグリュスよりも強いんですからね。

残高：	2万2000メイル
収入：	0メイル
支出：	0メイル

合計：2万2000メイル

## ダメ人間の回復魔法（後書き）

いや、なんか魔術書の暗号が気持ち悪いほど適当になじみがあります  
た  
た  
感想・評価・指摘お待ちしています！

## ダメ人間の乱鎌鼠討伐～その一～（前書き）

また討伐のお話です。

今回は罠を使ってみます。

## ダメ人間の乱鎌鼠討伐／その一

目線：広幸

未開の地での修行2日目。

俺はガルロスを倒して手にした奴の肉で朝食をすまし、次の大陸を目指して草原を歩いていた。あの魔術師が言うには、草原の奥にそびえ立つ山の向こう側に次の大陸があるらしい。

その時、電話が鳴った。

「もしもしー。だいぶ慣れましたか？」

「そこそこですかね。」

「じゃあいきなりなんですがクエスト依頼が来ていますよー。」

今回は乱鎌鼠の討伐です。」

（図鑑データ）

乱鎌鼠 別名：クロウラット 産物：乱鎌鼠の鎌

ハリネズミが大きくなつて針が切れ味のよい鎌に変わつた魔物。体から無数に生える鎌は、攻撃に優れている。

また鎌は頑丈で、防御力を高め。簡単には奴の体に傷をつけられない。

足からも鎌が生えており、スピードがある上に急カーブなどにも優れています。

「なるほど。これはかなりの強敵だ・・・」

「今あなたなら大丈夫ですよ。とつあえず今回の報酬は

基本報酬：2万メイル

産物報酬：乱鎌鼠の鎌1個につき8000メイル

物品報酬：乱鎌鼠チケット×3

です。」

「わかった・・・受けますね。

その代わり今から言つものを準備してもらつてもいいですか？」

「はい、買えるものは雑貨屋で買つてきますよ。」

「じゃあ、酸化促進剤と導線10mと長めの釘をお願いしてもいいですか？」

「はい。じゃああとで準備が完了したら転送しますんで。」

「頼みますね。では

俺は電話をきつて、罠を張るのに適正な場所を探し始めた。

罠を張るには周りに水がある場所でなくてはならない。

俺は湖が近くにある場所を見つけた。これなら罠を仕掛けられるであろう。

「水の精霊よ、我の体にその力を示せ！ウォータードリル！」

俺は湖の近くの地面を削り始めた。やはり魔力も上がつて、かなり削りやすい。

「こんなもんかな？」「俺は大きな穴をあけることができた。

そして、掘り出した土に湖の水を大量にかける。

土が泥へと変わった。これで準備は完了だ。その土を先程穴を掘つた地面へと戻す。

そして見た目が周りと変わらないよう上から普通の土をかけてカモフラージュする。

「完成だ・・・我ながら上出来じゃないかあ

俺はあまりにも罠が周りの地面と全く変わらないので自画自賛した。

その時電話がかかってきた。

「もしもしー。準備しましたよー。

導線10m（400メイル）

酸化促進剤（1000メイル×3）

40cmほどのかなり長い釘（600メイル）

合計：4000メイル

この4000メイルは今回の報酬から引かせてもらいますからね～

「ええ・・・まあしようがないですね。」

「では転送しますー」

電話がきれ、俺の横に魔方陣が出来上がる。そして、魔方陣から俺の頼んだ品物が現れた。

「最後の仕上げをするか・・・」

俺はかなり長めの釘と導線を取り出し、釘に結びつけた。

「それより、こんな長い釘何に使うんだらつか・・・」

俺はこんなに長い釘が雑貨屋に売っていたことに驚いた。

まあ今はそんなことどうでもいい。とつとクロウラットを探さな

くては・・・

俺は釘と導線10mを繋げたものと、酸化促進剤を持つてクロウラットを探しに行つた。

しばらく草原を歩いていると、大きな穴のあいている場所を見つけた。  
きつといこじが奴の巣なのであらう、と俺は考えた。

「とりあえず確認だ。炎の精霊よ、我の体にその力を示せー・ファイ  
アーボール！」

俺は巣の中へと炎の球を投げ込む。

「ビー・ギヤガギヤー！－！」

案の定、クロウラットの巣であった。奴は奇声を上げ、巣からでてきた。

「よう、クソ鼠ちゃん！俺が相手してやるぜー・НАНАНАНА НА  
А Н А！」

・・・どうやら最近俺は発狂しやすくなつてしまつたようだ。

「ギャググー！」奴は俺に突進してきた。俺は腰にある剣に手をかざしておぐ。

奴が俺にぶつかる瞬間に居合い斬りを決めてやるのだ。

奴と俺との距離がだいぶ近くなつた。そろそろいいであらうか。

「うおおおおおー！」俺は腰の剣を抜く。しかし、俺の計算は甘かつた。

奴は俺の剣の一撃を受ける瞬間に、足の鎌を使って急ブレーキを

かけて

そのままジャンプしたのだ。だから俺が剣を振ったときには奴は俺の頭上にいた。

「ビーギヤガガギヤー！」奴は全身の鎌を俺に向か、落ちてきた。

「ぐつ・・・・！」俺は奴の体をなんとか2本の剣で受け止めた。  
「ビーべーーー！」奴は攻撃を受け止められたことに激怒しているようだ。

「さてと、もう罷を使っちゃおつか

俺は罷のまゝへと走り出した。だが、奴も全速力で追つてくれる。

「ビーギヤー！」奴は鎌が生えている腕を振ってきた。  
俺の肩にその鎌が直撃する。その傷口から血がでている。

「やばい！なんとか逃げ切ないと・・・！」

この広い草原で隠れることは不可能だ・・・

俺は周りを見渡した。・・・そしてあるいは作戦を思いついた。

ダメ人間の乱鎌鼠討伐～その1～（後書き）

いい作戦とは・・・  
まだ考えてない！WW

ダメ人間の乱鎌鼠討伐～その2～（前書き）

眼を発動するお話です。

## ダメ人間の乱鎌鼠討伐～その2～

目線：広幸

俺は一度回復をしないとダメな程の傷を受けてしまった。  
しかし、草原には隠れられるところが無く、回復したくてもできない。

「なんとか逃げないと・・・。」

俺はその時、隠れられる場所を見つけた。

「そこ」だああああ！

俺はクロウラットの巣へと走り出した。

そう、この草原で隠れられるとしたら、あいつの巣穴くらいなのだ。

「ビーギヤギヤー！」 クロウラットもそれに気が付いて追つてきている。

「水の精靈よ、我的体にその力を示せ！ウォータードリル！」

俺はクロウラットの巣に入ると同時に、巣の入り口の土をドリルで削つた。

すると、入り口が完全にふさがって、クロウラットは入ってこれなくなつた。

「さてと・・・ヒールリング！」

俺は人差し指で輪を描き、できた輪を傷口に近づけた。

3分ほどして、傷口は完全にふさがつた。これで大丈夫だろつ。

「さてと、どうやってここから脱出するか・・・」

俺はとりあえずファイアーボールを発動し、明かりの代わりにした。

巣穴はけつこうな広さで、奥に進んでいくと奴の寝床と思われる場所を見つけた。

大量の葉っぱが置いてあり、寝心地はかなりよさそうだ。  
しかし、今俺には奴の寝床でぐっすりと・・・なんて暇はない。

「どうやら抜け道は無いらしいな・・・やつぱり入り口をもう一度ぶつ壊すしかないのか」  
しかし、まだクロウラットが入り口で待ち伏せしている可能性もある。

ならば、今俺がいる寝床の天井を壊して脱出しようか・・・  
しかし、ミスをしたら天井が一気に崩れ、その中に埋もれてご臨終がオチだ。

「やつぱり一か八かだ！入り口の壁を壊そー！」俺は再び入り口へと向かった。

入り口につくなり、手始めに上のほうの岩をよけ始めた。  
下からやっていくと、一気に崩れてしまい大きな音を立てる恐れがある。

「ふうー。それにしても結構重いな」

俺はダメ人間だ。身体能力も残念なので、中1の女子並みの筋力しかない。

そのため、との光が差し込んできたときにはもう2時間が経過してた。

それだけあって、クロウラットはもう待ち伏せを諦め、どこかに行ってしまったようだ。

俺はクロウラットを捜索し始めた。

「おお、見つけたぞ！」「俺はクロウラットを見つけた。幸いにも、闇のある場所とかなり近かったのでありがたかった。

「氷の精靈よ、我的体にその力を示せー・アイスピアー！」

俺の手には今までのようなつらら程度のものではなく、槍ぐら一の長さの氷の棘ができた。

・・・んまあ、太さはつまよじくら一なんだけどね・・・。

「喰らえー！」俺は思いつき氷の棘を投げた。

細い氷の棘は、クロウラットの鎌と鎌との間を通り、皮膚に突き刺される。

「ビーーーー！」貫通とまではいかなかつたが、かなり深くまで棘が刺さつてるので痛みに絶叫している。

そして奴はこちらを向くと同時に全身の鎌を逆立てて威嚇してくる。

「悔しかつたらコラチまで来いー！」俺は挑発して闇の方へと誘い込んだ。

怒りに狂つてこるクロウラットは、田の色を変えて猛スピードで追いかけってきた。

なんか以上に速いんだけど・・・まあ、無事に闇にたどり着いたから問題ないよな。

俺は急いであの完成度が異常に高くなつた泥の地面のところへと行く。

クロウラットは俺を追つてきてこる。そして、奴は泥の地面に足を

踏み入れた。

「ビー？」奴は地面の感触が急に変わったことに驚いている。奴はもがき始めた。しかし、もがけばもがくほど奴は地面へと沈んでいく。

「こいつをくれてやるー！」俺は酸化促進剤を取り出した。

酸化促進剤とは、その名前の通り『酸化を促進させる特殊な物質』だ。ちなみに粉タイプだった。

それを俺は奴の鎌めがけて大量にかけていく。

「ビーギヤアーー！」奴は体に大量の酸化促進剤を浴びながら沈んでいく。

H A H A H A ! 奴の象徴とも言える鎌がどんどん鋸びしていくじゃな  
い K A  
俺は無様な姿へと変わつていくクロウラットを見てかなり楽しんでいた。

「そろそろだ！」俺は腰にかけている剣を取り出し、まだ泥に沈んでいない部分を斬りつけた。

奴の鎌がなかなかに邪魔だが、やはり錆びてるので何回か斬れば鎌はポツキリと折れた。

「ギャガビーーー！」鎌をきられてかなり痛いらしく、悲鳴を上げている。

しかし、金稼ぎが田的な俺には同情なんてものは無い。

「早く死にたまえーーー！」俺はどんどん鎌を切り落としていく。

そして、だんだん奴の皮膚が見えてきた。

そこで俺はもう一つのアイテムである『釘に導線をつないだもの』を取り出した。

「刺され！」俺はクロウラットの露出した皮膚へと長めの釘を突き刺す。

「ビー！！！」またもや大きな悲鳴を上げている。

そして、俺は奴の背中から降りた。そしてある程度の距離をとつて導線を持つ。

「雷の精霊よ、我の体にその力を示せ！イナズマアロー！」  
俺は導線に電気を流した。電気は導線を伝わり、釘へと伝わり、クロウラットの体へと流れる。

「ビィイイイイイイイイイー！」奴はからだに直接電気を流されて相当苦しんでいる。  
しかし奴もとうとう覚悟を決め、最後の力を振り絞って泥から脱出した。

「ビィイイイ・・・」奴は腕から鎌を出した。どうやらこれが最終兵器らしい。

「ほう、お前を二つの剣で戦うというのか。・・・なり」  
俺は腰にかけていた剣を一本抜いて、奴の方へと向ける。

「ビィイイイ・・・」奴は赤い眼でこちらを睨みつけていた。  
俺も奴の様子をうかがっている。かなり緊迫した空気が俺達の周りに張り詰めていた。

これから、俺達の最期の戦いが始まるのだ。

## ダメ人間の乱鎌鼠討伐～その2～（後書き）

次は双剣と双剣の戦いです。

次に幕間的な物を入れたいのですが、意見・要望あつたら教えてください！

ダメ人間の乱鎌鼠討伐～その3～（前書き）

双剣ＶＳ双剣です。

## ダメ人間の乱鎌鼠討伐／その3

目線：広幸

俺はクロウラットを睨み合いをしていた。緊迫した空気が張り詰めている。

「ピギヤアアアアアア！」クロウラットは咆哮を放つた。

あまりにも声が大きかつたため、俺は耳を塞いで思わず目を瞑ってしまった。

俺が目を開いたときには奴はもう目の前にはいなかった。

クロウラットは俺の背後に回り込んでいて、俺が気付いたときには背中を鎌で斬りつけられていた。

「ぎやああ！」背中から血が飛び散る。傷口がだんだん熱くなってきた。

しかし俺も負けてはいない。俺は奴の顔面に剣を斬りつける。さすがに顔にまでは鎌もついておらず、剣が直撃した。

「ピギヤアアアアア！」クロウラットは顔面から大量の血を吹き出している。

奴はバツクステップで俺と距離をとった。

俺もそれに合わせて奴に近づく。そして、もう一度斬りつける。キン、キン・・・俺の剣の一撃は奴の鎌によつて止められた。

「ぐ・・・！」俺は必死に踏ん張る。今にも吹き飛ばされそうな力だ。

「ペギヤアア！…」奴は他の鎌で俺に攻撃してきた。

錆びているのであまりダメージは大きくは無いが、地味に痛い。

「ちくしょおおおー！」俺は剣を手放した。そして高速で呪文を唱える。

「炎の精霊よ、我的体にその力を示せ！ファイアボール！」

俺の両手に炎の球が出来上がる。今回は大きいのを作り上げた。

「ペギヤアア！」奴は俺の体を鎌で斬りつけようとしてきた。  
しかし、俺の方が動き出すのが速かつた。俺は奴の顔面に炎の球をぶつける。

「ペギュギュガギュガ！！」クロウラットは絶叫した。

顔面の皮膚がただれていて、かなり痛そうだ。

「水の精霊よ、我的体にその力を示せ！ウォータードリル！」  
俺の右手に空気中の水蒸気が集まり始め、水が回転を始める。  
その手で奴の顔面を攻撃した。皮膚がただれているのでかなりの痛みだらう。

「ギヤヤヤヤヤアウウ！」予想通り、かなり絶叫していた。

しかし、ここからが正念場だ。俺は奴の名前の理由をじることになる。

乱鎌鼠。その名前の由来は奴が死の直前にまで追い込まれることで知られることになる。

奴は空へと舞い上がった。そして、鎌を大きく振り上げて回転を始める。

まさに『乱舞』であった。これこそが乱鎌鼠の名前の由来なのだ。

回転をしたまま、クロウラットは俺の方へ突っ込んできた。

「ぐつ！」俺はすかさず剣を拾い、奴の攻撃受け止めた。かなりの重量感。少しでも気を緩めたら押しつぶされそうだ。

「ピギヤヤヤヤ！」再び奴は空中へと舞い上がった。どうやらこれが最期のチャンスであろう。

「炎の精霊よ、我の体にその力を示せ！ ファイアボール！」

俺は炎を剣に宿した。そして一度腰に剣を戻す。ちょっと熱いがそこは我慢だ。

そう、俺は今から飛び掛つてくる奴に居合い斬りを放つのだ。これしか奴を倒す方法は無いだろう・・・俺は覚悟を決めた。

「ピギヤヤヤヤ！」奴は空から回転しながら俺に突進してきた。

「来い！」俺はギリギリまで奴をひきつける。もちろんタイミングを誤れば即死だ。

「ピギヤアアアアアアアアアアアア！」奴と俺の距離は10cmまで迫った瞬間、俺は剣を抜いた。

素早く振りかざした剣が奴に直撃した。それと同時に、奴の鎌が俺の足に突き刺される。

「ブ・・・ギギギイ・・・」俺は一撃は奴の頭を切り落としていた。俺はクロウラットを倒すことができた。しかし、俺もかなりの深手を負った。

「うぐう！・・・・」足に刺された奴の鎌を抜くと激痛がはしる。

それと同時に大量の血が足から吹き出す。急いで止血しないと死んでしまう。

でしほりでおひい。

「ヒールリング！・・・」俺は最後の力を振り絞つて輪を作り上げた。

それを、まずは一番傷の大きい足に近づける。だんだんと痛みが和らいでいく。

30分もかかつたが止血はできた。しかし、歩くと傷口が開きそうなので動けない。

「…………」で魔物にでくわさないといいが・・・」

これがかなりの重労働。体が硬い俺には背中に近づけるのは無理がある。

「しかし、今は動けないからひとつと休憩しないことに。・・・・」

た  
・  
・  
・

# 目線：魔術師口ウ

「おやおや、かなりのケガでしたがクロウラットを倒すとは驚きですね。」

まさか、敵の巣穴に身を潜めるとは思いませんでしたね。

彼にはやはり特別な何かがあるのでしょうか・・・

普通の人ならあの状況で冷静さを保つことができずに、パニックに

しかし彼は冷静の状況を整理し、その上であんな発想ができるなんて本当に驚きですね。

「やつぱり彼の戦闘を見ているのは楽しいですねえー。

おつと、ハーブさんの方にも動きがありましたか・・・ちょっと見てみましょうか

# 目線：ハーブ

私は今朝早く起きて、ヒロコギと一緒にエストニアへ！って誘おうとギルドに向かったの！

「おかしいなー。寝坊でもしたのかなー？」私は最初はそんなこと

でも、それは違つた。・・・あの仕事一番のヒロゴキが脣になつて

「ねーヒロユキ見てない?」私はギルドの中の人に聞いてみた。でもみんなは「知らない」って言つたり、「誰だソイツ」って言つばかり。

私はひとつひとつ焦ってきた。マスターのフレアさんにも聞いてみた。

「マスター！ヒロユキがいなくなっちゃったの！知らない？」

「や、やれ、さあな？俺にもわ、わからざ

「わうですかー。探してみますー」

といつあえず私は夜まで待つてみることにした。

でも、こつになつてもこなー。ヒロコキの身になにかあつたのかな

・

「明日は絶対にきてくれるよね？・・・そだよーきっとわうに違  
いないよー。」

私は明日、ヒロコキに会えることを期待した。わうと今日の  
辛さも忘れてしまった。

・・・この時私は知らなかつた。神様に裏切られることが・・・

( 今回まだ報酬を貰つていないのでお金をカウントしません )

## ダメ人間の乱鎌鼠討伐～その3～（後書き）

次はハーブの想いと広幸の想いをネタに書いていこうと思います。

## ダメ人間の想い、ハーブの想い（前書き）

今回はハーブの想いとヒロユキの想いについて書きました。

## ダメ人間の想い、ハーブの想い

目線：広幸

俺は目を覚ました。1時間くらい経つただろうか。  
傷口は完治とまではいかないが、経つても開かないくらいまでは塞がつた。

「さてと、魔術師に電話するか。」俺はヒュペノイドコールスを取り出した。

（・・・しかしあの魔術師のネーミングセンスは何なんだろう・・・  
ロウネルサンダースとかヒュペノイドコールスとか森羅万象携帯用  
図鑑とか・・・・・・）

全部長つたらしいんだよ！）

俺が心中で愚痴を言い終わると同時に、魔術師と電話がつながった。

「はーい。もしもしー」

「あ、もしもし。終わりましたよ。報酬お願いします。」

「じゃあ転送させていただきますねー」

魔術師がそう言うと同時にいつものように魔方陣が形成され、クロウラットがいなくなる。

これはすごい魔法なのかもしれないが、俺にはもう慣れてしまつて驚くことも無い。

「なるほどー・・・確かに頂戴しました。では報酬は・・・

基本報酬：2万メイル

产物報酬：なし

物品報酬：乱鎌鼠チケット×3

といつといひですね。」

「ちょっと待て！なんで产物報酬がないんですか？」

「あー。それはですね・・・腕から生えている鎌以外の鎌が全て鋸びてしまっていますよ。

それに腕の鎌は貴方との戦闘によつて刃こぼれしていて使い物にならなくなっています。

「・ま・り！自業自得つてことですよ。広幸君」

(二)いつの喋り方、何回聞いてもむかつくな・・・)

「・・・そうですか。しようがないですね・・・まあ2万メイル手に入れば十分ですよ」

「あ、言い忘れてました。そろそろ大陸移動してもいい頃ですよ。次の大陸は《アルメタ氷山》です。アルメタ氷山は氷属性の魔物が多いですからね。

貴方は炎属性の武器を所持してますし魔法も使えます。戦いやすいでしょうね。

でも気を抜いてはいけません。頂上に行けば行くほど魔物は強くなっています。

しかも猛吹雪なので視界もよくありません。防具も耐寒用に変えたほうがよろしいでしょう。

どうですか？変えてみます？」

「んー。今の持つてるチケットで作れるなら・・・」

「はい。大丈夫ですよ！クロウラットはもともとアルメタ氷山の麓ふもと

から来た魔物です。

決して高いとはいえないが、それなりには耐寒能力も備えられていますし、

奴の固い鎌をベースとした防具は硬く、防御力も高めです。つくることをオススメしますよ。」

「はい、じゃあチケット3枚でお願いします

「あー。それだと一枚足りないので困りますね・・・  
あ！炎翼龍のチケット2枚も足してみましょつか！」

「それでもいいんですか！？」

「はい。少し耐寒能力と防御力は下がりますが、一応つくれます。  
かなり見た目はダサくなりますがね・・・（笑）  
(なんだよ最後の『笑』は！)

「まあそれくらいは我慢します・・・じゃあお願いしますね。では」  
俺は電話をきつた。そして、とりあえず魔物に教わらないで休める  
場所を探し始める。

「クロウラットの巣穴に行くか

俺はクロウラットの巣穴へと戻ることにした。

「ふうー。やつぱり寝心地はいいな

俺は奴の寝床で横になっていたのだ。予想通りふかふかしていて気持ちがいい。

「・・・今頃ハーブ、何してんだろうかな・・・」

俺はどうしてもハーブのことが忘れなれなかつた。

後悔している、ハーブに何も告げずになくなつたことを・・・  
後悔している、ハーブを振つてしまつたことを・・・・・・・・・・  
後悔している、一人で未開の地に修行しに来たことを・・・・・・  
しかし、後悔したつて何も変わらないことを俺は知つている。  
だから早くこの修行を終えてハーブと再会を果たし、次は俺から告  
白するのだ。

「心配してくれているかなー俺のこと・・・」

俺はそれだけが気になつて仕方が無かつた。

魔術師に聞いてみようか迷つたが、やっぱり怖くて聞けずにいた。

俺はそれからハーブのことばかりを考えていた。気付いたら涙が頬  
をつたつっていた。

「ああー。早く会いたいな・・・」

目線：ハーブ

私は今日も早くにギルドへと向かつた。今田にそばにヒロユキに会え  
ると信じて・・・・

しかし、どこにもヒロユキの姿はなかつた。私は泣きだつたなつた。  
でも、考えたの。きっと風邪なんじゃないかつてねー・

そこで私はヒロユキの家へと行つてみることにした。でも場所がわ

からない。

そこで名探偵ハーブの登場だあ！

まずは、地図と宿屋のパンフレットを用意する。そこで私は今から訪問する宿屋を絞り込むことを始めた。

1・ギルドを中心として左側にある宿屋

ハーブがずうーっとヒロユキのことを観察してたんだけど、ヒロユキは毎日、ギルドの左側からやってくることを見つけたの。だからきっとギルドの左側に宿屋はあるんだと思う。

2・比較的低家賃な宿屋

ヒロユキはお金をためることが大好きなんだよ。だから宿屋なんかにお金を使つたりはしないと思うんだ。つまり、比較的安い家賃の宿屋にすんديいると思つ。

そうしてどんどん塗りつぶしていくと、一つの宿屋が残つた。

そして私はその宿屋に訪ねてみた。すると、宿屋の人人がこう言つた。

「ああ、ヒロユキって人ならこの宿を借りているよ。

最近は姿を見ないけど風邪でも引いてるんじゃないのかな・・・」

「ありがとうございます！」

私はとうとうヒロユキの家を見つけて喜んでいたのーそして家へと向かつた。

「ヒロユキー！ヒロユキー！」私はドアを強くノックした。

しかし、なかからは何も返事が無かつた。・・・そして私はあるものに気が付いた。

異世界新聞が2日分、ポストに残つたままなことを・・・

異世界新聞とは毎日発行されている新聞で、魔物の情報とか天気とかが色々書いているものなの。

なんと言つても、そこにはスクラッチする部分がついていて、擦つてマークができたら、お金がもらえたりチケットがもらえたりするんだよ！

だからヒロユキは毎日、ギルドに新聞を持ってきて、熱心に擦つていた。

そんなヒロユキが風邪をひいたからといって新聞のスクラッチをしないはずないじゃん・・・

「ねえ・・・ヒロユキ・・・返事してよお・・・」

私はドアに向かってずっと泣いていた。口が沈んでもずっと泣いていた。

残高：2万20000メイル  
収入：2万 メイル  
支出： 40000メイル

合計：3万8000メイル

## ダメ人間の想い、ハーブの想い（後書き）

やつぱり一人が結ばれないのは心が痛いです・・・  
読者の方々はどう思っているんでしょうか?  
ちょっと意見を聞いてみたいんで感想お待ちしています!

## ダメ人間の氷山上陸（前書き）

今回はアルメタ氷山を田指すお話です。  
ちょっととイベントが始まりそうです。・・  
W

## ダメ人間の氷山上陸

目線：広幸

俺は気付いたら睡魔に意識を奪われていた。そして目が覚めたときはもう夜だった。

その時、魔術師から電話がかかってきた。

「・・・もしもし？」

「おやおや、寝起きのようですね。それより防具が完成しましたよ。今からそちらへ転送しますのでー。あつ、あと2万メイル頂戴しておきますねー」

（2万メイルって・・・クロウラットの報酬が全部吹き飛んだ。）

「・・・わかりました。では」

俺は電話をきり、早く防具が見たくてドキドキしていた。

魔方陣が目の前に現れ、輝きだと同時に防具が現れた。

「つおおおおおっしゃああーー！」俺は早速装備してみた。かなり軽量化されていてめっちゃ動きやすい。

防御力はまだわからないが、耐寒はばっちりだ。じつとしていても汗をかいてきた。

しかし、決定的に残念なところがあった。

かなり見た目がださい。あの魔術師の言つてた通りの残念な装備になつた。

銀色に輝いている腰周りと、銀色の鎧で「コーティングされた胸周りの部分、

それと短い鎌が装飾としてついていてカッコいい腕パートまではいいのだが、

頭と足はありえない。足はイグリュスの象徴であるビ派手な赤色をしていて、

クロウラットのメタリック色が台無しになってしまっている。  
最もおかしいのは顔パートである。顔パートもド派手な赤をベースとしているが、

なんと言つても一番残念なのは、イグリュスのあのブサイク過ぎる寝顔のデザインなのだ。

体はかなりのメタリックで騎士のような装備をしていてカッコいいのに、

顔面が中年のおっさんみたいになっていたので、『中年騎士』というあだ名をつけられそうな感じだ。

「ちくしょう……でもここは誰もいないだろうから見た目は気にしないでいいか」

俺が妥協したその時、魔術師からの電話がかかってきた。

「どうですか？ 防具は気に入りましたか？」  
(ここつ・・・いやみか！)

しかし大人である俺は怒りをぐつとこらえた。

「はい。見た目以外はかなり気に入りました。まあこっちには誰もいないだろうから問題ないでしよう。

では早速、アルメタ氷山に向かおうと思います。」

「おお、それは良かったです。その装備ならあそこの寒さくらい問題ないでしょ。」

「なるほど。わかりました。行つてみますね」

「それでは頑張ってください」

電話がきれると同時に、これからどうするかを考えた。

「とりあえず今夜はこの巣穴から出ないほうがいいだらうな

なぜなら、氷山までは長い道のりなので魔物に遭遇してしまつ可能性もあります。

ましてや夜なので周りが良く見えず、不意を撃たれる可能性もある。

今夜は諦めて睡魔に身をゆだねることにした。

・・・朝・・・

「ふわあー。よく寝たからすつきりしたぜ」

俺は目を覚まし、巣穴の中で軽い運動を終えた後にアルメタ氷山を目指した。

アルメタ氷山には向かう途中にクロウラットやゴブリンを見たけれど、寝ていたので気付かれないようにそっと逃げた。

3時間後

「ふうー。つかれたあーー！」俺は山のふもとまできていた。  
その時、魔術師からの電話が鳴った。

「もしもし」

「あー。もしもし、無事にアルメタ氷山にたどり着けたようですね」

（アンタ、どこから見てるんだよ・・・）

「はい。なんとかたどり着くことができましたけど・・・」

「そうですか。なら私から簡単なクエストを出しましょうか。

報酬金は〇ですけどね。」

「俺は報酬金〇のクエストなんてやりませんよ。」

「・・・わかりました。じゃあ特別報酬をつけてあげましょう。もしもしあなたがこのクエストを完了したならハーブさんと少しだけお話をさせてあげましょう。」

「え！？いいんですか！？」俺は突然のチャンスに興奮した。

しかし。それと同時に俺の頭の中にもう一つの思いが浮かび上がる。

自分がもう一度ハーブとあつてもいいのだろうか？

自分が急にいなくなつたことをハーブは許してくれるのだろうか？

俺は答えを出せずにいた。しかし、俺はやつぱり会いたくてしががなくなってしまった。

「わかりました。そのクエストを受けましょ。」

「ではクエスト内容を説明しますね。」

今回倒してもらいたい魔物は、『アイススライム』です。」

（図鑑データ）

アイススライム 別名：なし 産物：氷魔石

アイススライム。ブルースライムが氷山へと上がってきて、氷山で生き抜くために進化して、体が氷になつた魔物。攻撃力はそんなには高くないが、体液を飛ばしてくる。その体液に触れたところは一瞬にして凍り付いてしまう。場合によつては凍死することもある。

「意外と危ない敵じゃないですか！！」

「まあまあ、ブルースライムと攻撃力や守備力はあまり変わらないのでいけますよ。

奴らは山の3合目あたりに出現しますので、それでは～」

「なるほど。3合目か・・・」

俺は早速3合目を目指した。とつととハーブに会いたいからな・・・

しかし、このとき俺は考えてもいなかつた。  
自然の恐ろしさを・・・

残高：3万8000メイル  
収入： 0メイル

支出：2万  
メイル

合計：1万8000メイル

## ダメ人間の氷山上陸（後書き）

久しぶりの再会になりそうですね  
感想・評価お待ちしています！  
ww

## ダメ人間のボランティアクラウド（前書き）

今回は報酬なしのクラウドのお話です。

## ダメ人間のボランティアクエスト

目線：広幸

俺はこの時、氷山の3合目辺りに来ていた。魔術師の言つていた通り、1・2合目には全く魔物の姿は見えず、すんなりと登ることができた。

「しつかし、まだ3合目なのに寒いなー」  
しいて言つながら、寒さだけが俺の敵であった。幸いまだ吹雪ではない。  
しかもしも防具を脱いだとしたら凍死してしまつのであらうと思  
うと、ゾクツとした。

そして、俺は上のほうに何やら動く影を見つけた。  
それはまぎれもなく、『アイススライム』であった。  
奴はまだこちらに気付いていない。俺はバレンにようこそつと近づ  
いていった。  
しかし、俺が攻撃する前に悲劇が起きた。・・・魔術師から電話が  
かかってきたのであった。

「もしもしー、言い忘れてましたけど3体討伐してくださいねー」  
魔術師は俺の行動を監視しているから今俺が獲物の後ろにいることを知つてゐるはずなのにわざわざ大きな声で電話してきやがった。

俺は無言で電話をきつた。しかし俺が電話をきつた時にはもう遅か  
つた。

「ギーギギー?」奴はこちらの方を見ている。案の定気付かれてしま  
つたようだ。

「ギギヤガヤ！」アイススライムは妙な奇声を発し、口と思われる部分から液体を吐いてきた。

「危なつ！」俺は瞬時に体を捻り、体液を避けた。体液は地面に付着すると同時に氷へと変わった。どうやら過冷却水と似たようなものらしい。

（図鑑データ）

過冷却水とは・・・・

水が急激に冷やされて氷になるはずの温度に達しているのにもかかわらず、

水のままになっている液体。

衝撃を与えると水が凍りに変わり始める。（ロウペディアより記載）

（ロウペディアって何だよ！）

俺は心の中でそう思いながらも過冷却水とは何かを知った。

「ギギルガ！」そうしているうちにまた奇声を発した。

すると、地面からアイススライムが2体現れた。どうやら仲間を呼んだらしい。

「ギーギル！」奴らは一斉に俺の体に体液を吐いてきた。大量すぎて避けきれない。

「ぐはあ！」体液は俺の腹に直撃する。防具が一瞬にして凍りついた。

「くそ・・・取れない！」俺は必死に防具についた氷を取っていた。この氷のせいで大分動きが鈍くなる。だから早めに取り除いておきたいのだ。

しかし、へばりついた氷はなかなか取れずについた。

「ギーギル！」再び奴らは体液を吐いてきた。

「くそつ！」俺はとっさに腰にかけている剣を抜いて、体液に振りかざした。

俺は忘れていた。自分の剣の属性を・・・

剣は一瞬だけ凍り付いてしまったが、すぐに氷は溶けた。  
そう俺の剣は炎翼龍の剣だ。もちろん炎属性である。だから氷を溶かしたのだ。

「ギギ？」アイススライムは自分達の体液が効かなかつたことに驚いている。

「うおおおおおーー！」俺はその隙に一体のアイススライムを剣で斬つた。

やはり体も氷で覆われているため、剣がはじかれる。やはり奴の氷を溶かさなくではダメだ。

俺は左手の剣を腰にしまった。

「炎の精靈よ、我的体にその力を示せ！ファイアボール！」

左手に炎の球が出来上がる。その炎の球をアイススライムめがけて投げた。

「ギギガ！」アイススライムの体を覆っている氷がだんだんと溶けていく。

その瞬間に俺は左手にも剣を持ち、アイススライムを一つの剣で斬つた。

この時、俺は新たな技術を見につけていた。

【刻炎十字斬】という技だ。これは、剣で十字に敵の体を切る技である。

そしてその十字に斬つたところが剣の炎により燃えるのだ。

「ギ・・・ギル」アイススライムは、先程俺がファイアボールで氷を溶かしておいたので、

簡単に斬ることができた。そのまま奴は動かなくなつた。

これを他の二体にもやつしやつた。すると一瞬で殺すことができた。

しかし、大変なのはこれからだ。産物を取り出さなくてはいけない。産物である【氷魔石】は体液袋と呼ばれる体液で満たされている袋の中にある。

だから、衝撃を与えてしまうと体液が瞬間に凍つてしまい、

【氷魔石】は取り出せなくなってしまう。だから産物を取り出すのが困難なのだ。

しかし、それだけ難易度が高いといつのもあって報酬もかなり高めだ。

報酬はその時によつて変わるが、だいたい2万～3万メイルくらいらしい。

「さてと・・・はじめるか！」

俺はまず一体目の体を慎重に切り開いた。なかには色々と臓器があつて気持ち悪い。

図鑑によると、体液袋は内臓に覆われているので、まずは周りの内臓を取らなくてはいけなかつた。

「あ・・・」俺は内臓を取つてゐるうちに、体液袋を破いてしまつた。

中から体液が染み出してきて、一瞬で凍りついた。一体目はダメになってしまった。

2体目にも体液袋に穴を開けてしまい、失敗に終わった。  
最後は3体目だ。これで失敗したら俺の貴重な報酬が泡になってしまつ。

「うおおおおおおおおおおー！」俺は一瞬にして体を切り開き、内臓を取り出した。

そして、体液袋に切れ目を入れる。そこからそっと手を入れて氷魔石を取ろうとした。

しかし、最悪の事態が起つた。

そう、体液が衝撃によって凍り始めてしまったのだ。もちろん俺の手と共に・・・

「ああああああああああああああああああああああああーー！」

田線：魔術師ロウ

「どうやら倒せたようですね。」私は驚きながら言った。

彼はアイススライムを倒せたようです。しかし、私が驚いたのはそこではないのです。

体液の中に平氣で手を突っ込んで氷魔石をとる人がいますかね？

面白い。彼は非常に興味深いですよ。

「 そうでした。こっちも準備しないといけませんね。  
すっかり忘れてましたよ。ハーブさんに広幸君と会いたいか聞くこ  
とをね  
・  
・

残高 :	1万8000	メイル
収入 :	0	メイル
支出 :	0	メイル

合計 : 1万8000 メイル

## ダメ人間のボランティアクエスト（後書き）

次はきっとハーブとロウガメインの話になりそうですね。

魔術師と美少女（前書き）

この前言ついた通りの、ロウとハーブの出合の話です。

## 魔術師と美少女

目線：広幸

俺はなんとか手にくついた氷を溶かすことができた。  
しかし、産物の氷魔石を獲得することはできずに、貴重な報酬を貰  
い損ねた。

「ぐつ・・・まあしようがない。先に進むか」

俺は気を取り直して山頂を目指して歩き始めた。

目線魔術師ロウ

私はお気に入りの藍色のマントを羽織つて、ハーブさんのいるブロ  
ンダ街へと向かう。

「そういうば彼女と会うのは初めてですね・・・」

私だって初対面の女性には紳士としての最低限のマナーを守るひつと  
思います。

「どれどれ・・・どこにいるんでしょうかね。」

私はマントの中から一枚の紙を取り出した。これは『魔増紙』とい  
うものです。

魔増紙と言うのは、魔力を増大させる特殊な紙ですよ。

魔方陣をこの紙に書くことによって、少ない魔力で魔方陣を形成す

ることが可能なのです。

ですから私の使っている上級魔法には必須のアイテムなんですよ。

「さてと。追跡魔法といきましようか。エンジェル・アイ！」

私は高速で魔増紙の上に複雑な形式の魔方陣を書き始めた。

そして、それを地面に置くと魔方陣が輝きだした。

そこから、ブロンダ街の地図が現れ、その地図の上に一つの点が現れる。

「なるほど。ここですか？」

そう、その点の位置にハーブさんはいるんですよ。わかりやすい魔法でしょ？

「じゃあ行きましょうか。ムーブワープ！」

私はもう一枚の魔増紙を取り出し、先程の魔方陣よりも複雑な魔方陣を書く。

魔方陣は形式が複雑であればあるほどより高レベルな魔術を使えるのですよ。

「これでよしつと」私は地面に魔方陣の書かれた魔増紙を置く。

そして魔方陣が大きな光を放ち始める。そして私はその魔方陣の中へと足を入れた。

すると、私の体は魔方陣の光へと吸い込まれていった。

#### 目線：ハーブ

私はずっとヒロユキの家の前が泣いていた。その時、魔方陣が現れ大きな光を放つ。

「さやあ！？・・・何？」私は涙を拭きながら言った。

そして、光の中から藍色のマントを羽織った謎めいたおじさんが現れた。

「おじさん・・・誰？」

「おやおや、おじさんは失礼ですね。・・・まあそこは許してあげましょ。」

あなたはきっと広幸君のことを探していたんですね？」

このおじさんはなんでヒロコキのこと知っているんだろ？

「そうです。けどなんでおじさんはヒロコキのこと知ってるの？」

「君は広幸君が違つ世界から来たことを知っていますか？」

「え？」そんなの初耳だよ！・・・なんでヒロコキはそんな重大なことをハーブに隠してたの？

「あらら、知らないようですね。では最初から話していくましょうか。

まずは、広幸君はこの世界に来る前に一度死んでいます。（死にかけたが正しいですけど）

しかし、私はそんな広幸君にチャンスを与えたのです。

広幸君はこちラの世界でもう一度人生をやり直すことを決意したのです。

そして私は彼をこっちの世界へ転生したんです。その時に私は初めて彼と知り合いました。

そして、彼に最低限こっちの世界で生き延びるための魔術を教えて、あなた方のいうギルドへと彼を送り届けたのです。」

「そうだったんだ……ならこの人がハーブにヒロコキと出会えるきっかけをつくってくれたんだ！」

「それで話を続けますね。今、彼はここにいないことを知っていますよね？」

彼はあなたとイグリュスの討伐を終えた後、修行のために『未開の地』へと行つたのです。」

「え！？そんなことハーブに教えてくれなかつたよ！？」

私は驚いた。ヒロコキが誰にも言わないで一人で行つちゃうなんて・

・  
ハーブのこと本当に嫌いなのかな・・

「そりやそうですよ。彼はハーブさんには絶対に教えたくなかったようですねん。

絶対にこんな危ない修行に巻き込みたくなかつたんだと思いますよ。だけど広幸君はあなたのことを愛していますよ。

彼は「修行が終わつたらハーブに告白する」とずっと言つてましたからね。

でも彼はハーブさんが恋しくなつてしまつたらしいです。だから今回はここにきました。」

そうだつたんだ。良かつた、ハーブのこと嫌いになつてなくて・・・でも悲しいよ・・・ハーブだつてヒロコキに心配されるほどか弱くないんだから！

「で？一体なんでここに来たんですか？」私はヒロコキの師匠らしき人に聞いた。

「それはですね・・・あなたを一度だけ広幸君に会わせるためにこ

「ここにきました。」「

「え？ なんで急にヒロコキがそんなことを？」

「いや、正確には私が彼にハーブをとあわせてあげましょうか？」  
と提案したんです。

彼も最初は迷つてたようなんですが、やつぱり貴方と会いたい気持ちが勝つてしまつたらしく、  
ちが勝つてしまつたらしく、

会わせてください」と言つてきましたよ。」

「なるほど……そりなんですか

「それでですね……貴方は広幸君と会いたいですか？」

「はい！ もちろん会いたいです！」

「わかりました、それでは話は早いですね。あなたを広幸君のいる  
未開の地へと転送します。」

「え？ ちょ、急にですか！？」

師匠は私の質問に一切答えないでポケットから謎の紙を取り出して、  
魔方陣らしきものを書き始めた。

そしてそれを私の足元に置く。すると魔方陣はいきなり光を放ち始めた。

「さやあ……」

私は光の中へと消えていった。

目線：広幸

俺はどんどん山を登っていた。その時、目の前にいきなり魔方陣が現れた。

「この魔方陣の形は・・・魔術師だな」俺は魔術師が何かを転送してきたんだな考えた。

光の中から女性のような何かが姿を現す。それは俺のよく知る人物であった。

「ハーブ！？」

残高：	1万80000メイル
収入：	0メイル
支出：	0メイル

合計：1万80000メイル

魔術師と美少女（後書き）

本日は明日の書き溜めをして寝ます。W

## ダメ人間の再会（前書き）

今回は結構感動的な要素を詰め込んでみたつもりです。

## ダメ人間の再会

目線・広幸

「ハーブ！？」俺は魔方陣から現れた人の姿を確認して、驚いた。

「寒つ・・・あ、ヒロユキ！」ハーブも俺に気付いたらしく、俺に抱きついてきた。

「・・・・バカ」ハーブは声を震わせながら言つた。ビリやらい泣いているらしい。

「『』めんな。・・・でも、お前を巻き込みたくなかつたんだよ・・・」

「そんなの関係ないよ・・・話してくれても良かつたじゃん！」

「『』めん・・・」

「ヒロユキの

師匠みたいな人から教えてもらつたよーヒロユキが違う世界から來たこと。

・・・・どうして教えてくれなかつたの？今までずっと隠してたの？

ハーブは泣きながら俺に問い合わせる。

「隠してたわけじゃないよ・・・ただ、ハーブがそのことを知つたら俺のこと嫌いになるかもしねないと思つて・・・」

「そんなことで嫌いになるわけ無いじゃん！－ハーブがどれだけヒロユキのこと好きか分かつての！？」

ヒロユキのバカ！ダメ人間！アホ！まぬけ！ろくでな……」

「もういい・・・分かつたから・・・許してくれ」

俺はハーブの頭を撫でながらハーブに謝った。（・・・結構恥ずかしいんだが）

「・・・」ハーブは黙り込んだ。でも、さつきまでの顔が嘘のようと思える笑顔になっていた。

「わかった。もう許す！・・・でもこれからは約束だよ。ハーブには絶対に嘘をついちゃダメだし、

隠し事しちゃダメだからね！その代わりハーブもヒロユキに嘘つかないから」

「分かつた。これからは約束するよ」

俺はそう言ってハーブを抱きしめた。（・・・やっぱり結構恥ずかしいんだが）

「・・・ヒロユキ、防具ダサイ」

「それは言わなくていいだろ！」

それから俺達は色々なことを話していた。

初めて出会った時のこととか、クエストに行つた時のこととか、デイトの事とか・・・  
イグリュスを一人で倒したこととか、俺が未開の地で倒してきた魔物のこととか・・・

たくさんのことを一人でずっと話していた。そして、途中で電話が鳴った。

「久しぶりの再会はびっくりですかー？」それは魔術師からであった。

「はい。楽しませてもらっていますよ」

「それですね・・・最後に君に決めてもらいたいことがあります。選択肢は2つです。よく考えてくださいね。

1・広幸君だけが修行を続ける。  
2・ハーブさんも一緒に修行を続ける。

このどちらかを選んでください。しかし、2を選んだ場合は、あなたの所持金は全て吹き飛びます。

もしも1を選んだ時は、あなたの所持金を10倍してあげましょう。どうします？

「ヒロユキ、一体どうしたの？」ハーブが聞いてくる。

「ハーブ、お前は俺と一緒にこの未開の地で修行をしたいか？」

「もちろんだよー」ソリ修行できるように準備してきやつたもんねー」

ハーブは持っていたバックから修行に使いそうな色々な道具を見せてきた。

「さうか・・・俺はしばらく考え込んだ。ハーブは修行を続けたいらしい。

でも、俺がこの世界にきた本当の理由は何なんだろう？  
それは、『金を荒稼ぎすること』であった。

もしも俺が一人で修行をすることを選んだら、所持金は18万メイルという大金になる。

これだけ持つていれば俺はとても満足する程の金額だ。

しかし、もしもハーブと一緒に修行をすることにしたら、所持金は0になつてしまつ。

そうなると、今まで溜めてきたお金が一気に吹き飛んでしまうのだ。

「それで、どうしたの?」ハーブは聞いてきた。

「ハーブ、よく聞いてくれ。今俺は魔術師に二つの選択肢を貰えられている。

一つはハーブと一緒に修行をすることだ。

そもそもう一つは俺一人だけが未開の地に残り、修行を続けることだ。もしもハーブと一緒に修行を続けることを選んだら、俺の所持金は0になつてしまつ。

しかし俺一人が未開の地での修行に残り、修行を続けるといつまでも選んだとしたら、

ハーブとはしばらく会えなくなつちゃうけど、所持金が10倍されるらしいんだ。」

「・・・」ハーブは俺の予想通り複雑な気持ちになつてしまついた。

「ハーブ、じゃあ俺がこの世界に来た理由を教えてあげようか?」

「うん」ハーブは小さく頷いた。

「俺がこの世界に来たのは、『金を荒稼ぎするため』だ。

前の世界ではたくさん働いても、スライムを倒すと同じくらいのお金しかもられてなかつたんだ。

それが俺は凄く悔しくて、この世界で絶対に金を荒稼ぎして大金持ちになつてやる、と決意してこの世界にやつてきたんだ。だから俺は金だけが目的でこの世界に来たんだ。」

「それじゃあ・・・」

「でも、俺にはもう一つのこの世界に来た理由がある。

それは、この世界で人生をやり直し、生きることが楽しいこということを感じるために来たんだ。

俺はお前も知つていい通り、ダメ人間だ。それは前の世界でも変わらなかつた。

生きることを楽しいなんて一度も思つたことは無かつたんだ。俺はそんな人生に心底うんざりしていた。

でも俺が死んだ後、あの魔術師に『出会つてもう一度人生をやり直せませんか?』と言われたんだ。

最初はやり直さなくともいいや、と思つていたんだ。でも、俺は考えた。

俺には前の世界での未練がたくさんある。まだやりたいことがたくさんあつたんだ。

だから俺はこの世界に来てもう一度人生をやり直して、自分を変える、つていうのがもう一つの理由だ。

俺はこの世界に来てハーブに出会い、初めての恋愛体験や、お金を稼いだり、

自分の命を懸けた魔物との戦いを通して、自分を大きく変える」とができると思った。

今まで生きることに楽しいなんて思つたことは無かつたけど、こんなに生きたいなんて思つたことは初めてだ。

今まで恋愛なんて興味ないし俺とは無関係だと思っていたけど、ハーブと会つて、恋愛つてこんなに楽しいんだと思えたし、初めて人のことを好きになれた。

今まで命のありがたみなんて少しも感じてなかつたけど、魔物との殺し合いをして命のありがたみを知ることもできた。

だから俺はこの世界にやってきて本当に良かったと思つている。

・・・だから、今の俺にはお金よりも大切な物がある。

俺の選んだほうは・・・『ハーブと一緒に修行をする』だ!』

「わかりましたよ。所持金は全部消えますがいいですか?」

「もちろんだ。」

「わかりました。それでは修行頑張つてくださいね~」そう魔術師は言つて電話がきた。

「ヒロユキ・・・本当にそれでいいの?」

「これが俺の選択だ。一切変える気はないよ。」

「ヒロユキ・・・大好き!」ハーブは俺にさつ一度抱きついてきた。  
そして、俺は人生初のキスをした。

田線・魔術師ロウ

やはり広幸君はこの世界を通して大きく自分を変えられたようですね。

私もこんなに広幸君が人生を楽しんでくれたのは嬉しいことですよ。

「広幸君、これからも頑張つてくださいね。彼女さんを悲しませる」となんて絶対にしてはいけませんよ。」

ハーブさんは本当に心が綺麗な人でしたよ。私も広幸君がそんな人に愛されてもらえて幸せです。

残高：1万8000メイル  
収入： 0メイル  
支出：1万8000メイル

合計：

0メイル

## ダメ人間の再会（後書き）

次からは一人でのラブラブな修行？が始まります  
感想・評価お待ちしています！

ダメ人間の氷刃龍討伐～その1～（前書き）

今回は一人の久しぶりのクエストです。

## ダメ人間の氷刃龍討伐／その一

目線：広幸

俺とハーブは山をどんどん登っていた。途中にアイススライムが何度も現れたが、ハーブと一緒に楽しく？魔物を倒していった。やっぱりハーブとやると効率よく魔物が倒せる。

「ねえーヒロヨキ、わっさからアイススライムの姿が見えないよ？」  
ハーブは言つ。

その通りだ。先程からアイススライムの姿が見当たらなくなつていた。

更に不可解な点は、アイススライムが俺達を追つてきて俺達は逃げていたんだけど、

ある場所を境に奴らがピタリと動きを止め、追つてこなくなつたのだ。

まるで、結界でも張られているのかのように・・・

俺が考えていたとき、魔術師から電話がきた。

「もしもしー。新しい依頼が来ましたよー」

「今日はなんですか？」

「今日はアルメタ三大神の一體です。その名も『グラビティウス』です。」

（図鑑データ）

グラビティウス 別名：氷刃龍 産物：氷刃龍の鋭刃

アルメタ三大神の中にも入る凶暴な龍のような姿の魔物。

体はぶ厚い氷によって覆われていて、4つの足から鋭利な氷でできた刃が生えている。

そして最大の武器は奴の吐息である。これは、絶対に避けなくてはいけない。

奴は体の中で吐息の湿度を調節している。更に息には爆龍粉が含まれている。

(爆龍粉とは、龍種族のみが体内に備蓄している粉である。

これは非常に発火しやすく、よくある火を噴くドラゴンは爆龍粉を吐き出しているのだ。

しかし、これはかなり湿気に弱く、乾燥していないと発火しないという欠点がある。)

湿度が高いとそれだけ水分が多く、吐き出された息の中の水分が氷へと変わる。これで攻撃してくる。

逆に湿度が低いと、爆流粉が発火し、猛烈な龍炎を吐き出すのだ。だから、奴が息を吐く予備動作を始めたときには一度逃げたほうが良いであろう。

「なるほど。これはかなりの強力な魔物ですね。」

「でもこの魔物を倒すと貴方達のギルドレベルが3になる、とフレアが言つてましたよ。

ちなみにコレが報酬です。

基本報酬：5万メイル

産物報酬：氷刃龍の鋭刃1個につき1万5000メイル

物品報酬：氷刃龍チケット×6

ですよ。かなり報酬は高めですね。」

「なるほど……どのみちわたくしは通れないのか。じゃあ取扱します！」

あ、いつもより道具を用意したいのですが……」

「わかりました。代金は今回の報酬から引かせてもらいますからね。」

「

「ぐつ……わかりました。では早速準備して欲しいものをお聞い  
ますね。」

- ・ゲル化剤（同じく大量に）
- ・ガソリン（もちろん大量に）
- ・乾燥剤（同じく多めに）
- ・爆竹×3個

これらをお願いしますね。」

「わかりましたー。あとで転送しますねー。では、電話がきた。

「暇はもつ持たないし、早速グラビティウスを探しにいくか」

「よおしー出発だー！」ハーブはいつになく張り切っている。久し  
ぶつだからきっと楽しみなんだよな。

そうして俺達はグラビティウスの搜索を始めた。

～しばりくして～

「……いらへんにいるのか？」俺はただならぬ緊迫した雰囲気を感じ  
た。

クロウラシットの時と同等、いや、それ以上の大きなオーラを感じる  
のだ。

「きっとこのオーラを感じてアイススライム達は近づいてこれなかつたんだね」

「多分そうだな。よし！早めに見つけ出そうか。」俺達はどんどん山の上へと登つていいく。

そして、8合目辺りへと登つてきたとき、地面が大きく揺れた。

「ぐるぐる…下からだ！」俺はハーブにそう言った。  
地面の揺れはだんだんと大きくなつていいく。きっと近づいているのであろう。

そして突然、目の前の氷の地面がバキバキ、という音を立てて二つに裂けた。

そして、その地面の割れ目から体を白銀の氷で覆つている龍が現れたのだ。

白銀の体から生えている龍の象徴ともいえる翼を大きく広げ、  
眼を真っ赤に染めて、前足の刃をこちらに向けてこちらを睨みつけ  
ている、まさしく王者だった。

「ギルルルルル…」龍は前足から生えている一本の氷刃をこちらに向けて威嚇している。

「よし！ハーブ、まずは罠が届くまでアイツの体力を削るぞ…」

「うん、わかった！」

俺とハーブは剣をグラビティウスに構えた。武者震いが止まらない。

「ギルル！」グラビティウスは大きく飛び上がった。  
大きく体を捻つていて、正直何がしたいのかがわからなかつた。

しかし、その予備動作は恐ろしいものであった。奴は体を瞬時に元に戻した。

その瞬間に奴は息を吐き出して、回転のかかった吐息を飛ばしてきた。

吐息にはたくさんの水分が含まれていたらしく、空中から落ちてくる際に氷の塊へと変わっていた。

「ぐう！・・・」その氷の塊は俺の方に落ちてきた。  
俺はなんとか剣で受け止めたがもの凄い衝撃が大きく、膝を地面につけてしまった。

「ギルギギー！」奴は空中から俺に氷刃を向けて飛び掛ってきた。  
「ぐはあー！」氷刃によつて俺は体を斬られた。その瞬間に俺の体から血が飛び散る。

「ヒロユキー！」

## ダメ人間の氷刃龍討伐～その1～（後書き）

三大神とかあと2回も魔物ださないといけないじゃん！！！  
感想・評価お待ちしています！

## ダメ人間の氷刃龍討伐／その2

目線：広幸

「ヒロユキ！」ハーブの声が聞こえると同時に、俺の体から血が吹き出した。

今までの魔物とは格が違うことを俺は一瞬で悟った。

「くつ！ ヒールリング！」俺は人差し指に輪を作り出し、傷口へと当てる。

傷が深くなかったというのに、魔物をたくさん倒して魔力があがつてきたおかげもあって、

傷口がふさがるのにはさほど時間はかからずにするんだ。

しかし、俺が傷を治している間にもまた奴は空へ大きく飛び上がる。

今度は俺じゃなく、ハーブのほうを向いて体を捻り始めた。

「ハーブ危ない！」俺は叫んだ。その声はしっかりとハーブに聞こえていた。

「任せて！」ハーブは背中の太刀を抜いて上空のグラビディウスに構えた。

太刀を構えるフォームは以前よりも美しくなっている。

「ギルガ！」グラビディウスは体の捻りを元に戻した。その瞬間吐息が吐き出される。

吐息には水分が多く含まれていた。一瞬で氷の塊へと姿を変える。そしてハーブはその氷の塊へと一太刀をいた。そして氷は綺麗に二つに切れる。

「ギルルガ！！」グラビティウスは更にそのままハーブへと飛び掛けた。

「甘いわ！」ハーブは飛び掛つてくる奴の腹へと潜り込み、一瞬で一太刀を浴びせた。

「ガギルアアア！！」グラビティウスの腹を覆つている氷に少しひビが入り肉が姿を現す。

ハーブの太刀の切れ味はかなりいいらしく、あのぶ厚い氷をも切り裂いた。

「ヒロユキ！援護して！」ハーブは俺に言った。

いつものハーブの二コ二コした顔とは全く違い、無双の狩人のような真剣な顔立ちだ。

「わかつた！炎の精霊よ、我の体にその力を示せ！ファイアボール！」

俺は火の玉を造形し、グラビティウスの顔面へと浴びせる。そしてひるんでいる奴にハーブが一太刀を浴びせていく。奴を覆つている氷にだんだんヒビが入ってきた。そろそろ罠を使いたい頃だな。

その時魔術師からの電話がきた。ナイスタイミングだね、うん。

「もしもしー購入しましたよー。合計金額は5000メイルです。」

「わかりました！早く転送して！」

「あー。領収書とかはいりますか？」

「こらねえよ！てか今まで聞いてなかつただろ！なんだ？嫌がらせか！？」

「わかりましたってば（笑）

「最後の（笑つてなんだよーお前もとことん嫌な奴だな！）

「弟子にそんな言われるとは・・・（鳴）」

「何でお前は『泣』じゃなくて『鳴』なんだよー動物か！」

「私は牛ですよ。メニ～」

「羊じゃねーか！！」

「・・・なかなかキレのあるシッ ハリをありがとうございました。  
では

そう言って電話がきれると同時に、魔方陣が目の前に現れた。  
魔方陣の中から俺の頼んでいた品物が姿を現す。早速俺は品物をあ  
さつた。

「まずは・・・ハイツとハイツを・・・」

俺はすぐにゲル化剤とガソリンを取り出して、一気に混ぜ合わせる。  
しばらく混ぜるとドロドロになつたガソリンが完成した。これをガ  
ソリンの入っていたポリタンクに移す。

これを持ちながらゆっくりとグラビティウスに近づき、ぶつかける。  
奴の全長はだいたい3メートル。普通にかけようとしても届かない。  
だから俺はポリタンクを奴の頭上まで投げ飛ばし、ハーブにポリタ  
ンクを斬つてもらつた。

ポリタンクは真っ二つに割れ、中からドロドロになつたガソリンが奴の体にかかる。

え？なぜ俺がただのガソリンじゃなくゲル状ガソリンにしたのかつて？

それはだな、ただのガソリンじやすぐに炎が消えてしまうからだ。ゲル状にしたガソリンだと奴の体に付着しやすく、

炎をつけた後、すぐに炎が消えることはなくなるのだ！

「炎の精霊よ、我の体にその力を示せ！ファイアボール！」

俺はゲル状のガソリンが体中に付着している奴に炎の球を飛ばした。そしてその炎の球がグラビディウスの体に直撃すると同時に、ガソリンに引火した。

「グワアアアアー！」奴は絶叫した。奴の体を覆つている氷がどんどん融けていく。

「わかった！」俺とハーブはグラビディウスの露出した皮膚を剣で

斬り始めた。

「ガアアアアアー！」所詮グラビディウスも氷の鎧が無くなると弱くなつてしまつた。

俺達は苦しむグラビディウスに何の躊躇いも無く斬り続けた。

そして体を切つていいる途中で俺はお目当ての元を見つけた。

そう、奴の体内に溜まつてゐる『爆龍粉』を溜め込んでいる臓器を見つけたのだ。

そこで俺はその臓器を切り開いた。中から大量の爆龍粉が姿を現す。

そこで俺は乾燥剤を取り出して、爆龍粉の入っている臓器の中に詰め込んだ。

なぜ俺が乾燥剤を奴の臓器に詰め込んでいるのかと言つと、爆龍粉は湿度の低いところでは燃えない。そのために奴は体内で爆流粉を燃やさないために湿度を高くした臓器に爆流粉をためこんでいるはずだ、と俺が考えたからだ。

だから俺は乾燥剤を使って湿度を下げて、奴の臓器の中で爆流粉を爆発させるつもりなのだ。

「これでよしつとー」俺が乾燥剤を全て詰め込んだ頃には奴の炎が全て消えていた。

「ハーブ！ 急いでこいつから離れるんだ！」俺はハーブに指示をした。

奴もじうやら死を覚悟して、覚醒モードに入ったようだ。

また全身を氷が覆い始め、今まで露出していた傷口が完全にふさがつた。

そして再び奴の足から氷の刃生えてきて、それをこちらへ向けて威嚇している。

俺も奴との間合いをとつて奴の様子を伺っている。

「ギルル！！」奴は今までに無いスピードで空中へと舞い上がった。そし空中でいきなり消えたかと思うと、一瞬にして俺の背後へと回りこんでいた。

「何！？」俺はあわてて後ろを振り返る。しかし振り返った頃にはもう奴の刃が俺に向けて振りかざされていた。

「やばい！」俺は思わず目を瞑った。しかし、俺には刃があることがなかつた。

ドオオオオオン、という爆発音と共に俺が目を開くと、奴は地面に倒れていた。

俺がやられる前にあいつの腹の中の爆龍粉が爆発してくれたようだ。  
「倒した・・・本当に倒したんだ！」  
俺はアルメタ三大神のうちの一體である【氷刃龍 グラビティウス】を倒したことに歓喜した。

「ヒロユキ！ やつたね！」

「ああ！」

## ダメ人間の氷刃龍討伐～その2～（後書き）

これでグラビーティウスとの戦闘はおしまいです。  
報酬とかは次回に回します。

## ダメ人間の鬼畜な拷問（前書き）

今回は幕間的な感じのものです。  
ハーブがヤンデレ！？

## ダメ人間の鬼畜な拷問

目線：広幸

俺達は無事にグラビティウスを倒すことができた。これもハーブがいてくれたからである。そして俺は魔術師へと電話をする。

「もしもしー。こちら魔術師ロウのハンバーー・・・」

「もうそのぐだりはいいよ！早く報酬よこせー。」

「もう、そんな急がなくたつていいじゃないですか～。  
じゃあグラビティウスはいただきますね～」

そう魔術師が言つといつものように魔方陣が現れ、グラビティウスは魔方陣の中へと消えていった。

「なるほど・・・では報酬を言いますね。

基本報酬：5万メイル

産物報酬：氷刃龍の鋭刃×4（6万メイル）

物品報酬：氷刃龍チケット×6

ここから5000メイルを引かせてもらいますね。

ところで報酬金は広幸君の家とハーブさんの家に分割して渡しておきますか？

「その必要は無いです！」ハーブは俺の電話を取り上げて魔術師に言った。

「あなたは報酬入らないんですか？」

「いや、だつてこの修行終わつたら同居するのでもう収入は一人で合わせますから」ハーブは照れながら言つてゐる。・・・俺はそんな話一言も聞いていないぞ！

「そうですか。末永くお幸せに～」魔術師は電話をきつた。

「おいハーブ、俺はそんな」と一度も聞いていないぞ？

「うん。だつて言つてないもん」

「なんでそんなこと平然と言えるんだよ！俺だつてちゃんと考えたいんだ！」

「でもハーブと一緒に生活つるといつぱりあるよ～」俺はハーブにしつぶやかれ、妄想をはじめた。

只今妄想中

「あー今日も疲れたー」俺は家にと帰つた。

「おかえりなさい、あなた。」そこにはエプロン姿のハーブが・・・

ヌフオ！！

「今日もたくさん稼いできたよ

「お疲れ！はい、」褒美「ハーブは俺にい」褒美のキスを・・・

ヌフオオオ！！

「せんと・・・」俺は「優美を貰つた後に双剣を部屋にしまつてく  
る。

そしてしまい終えた後ハーブが「つづけてくるんだ。

「先に」「は」と「する？」お風呂にする？」

「じゃあお風呂にしようかな」

「なら一緒に入るー」「ハーブはそう言って抱きついてくる。  
ああ・・・・」これは・・素晴らしいといいといいといいとい  
いい！――

「ヒロユキ、鼻血でてる」俺はハーブにそう言われふと我に戻った。

「あ・・・本当だ。」あまりにも妄想で興奮してしまっていたよ  
うだ。

そしてハーブは俺の方をじーっと見ていく。

「ヒロユキ、なんかいやらしこ」と考えてたでしょ  
ハーブがじーっと見てくる。・・・これは否定したほうがいいんだ  
よな?

「じてないよー。」

「鼻血はいやらしこ」とを考えないとでないんだよー。

くつ！・・・これでもダメなのか・・・ならば！

「・・・考へてたよ！でも安心して！ハーブのことを考へてたわけ  
じゃな・・・。」

「安心しない！」ハーブは俺の首を絞めてきた。・・・逆に怒らせ  
てしまつた。

「嘘です嘘です嘘ですはなししてください」

俺は必死に抵抗した。だんだんと意識が薄れてきたからだ。

「もう・・・ダメ・・・」俺はとうとう意識を失つてしまつた。

この後、一時間にも及ぶハーブの拷問が待つてることを知らずに・  
・・・

それから・・・

俺は目を覚ました。するとそこは洞窟のような所であつた。

俺は目を覚ますなり外の様子を見に行こうとしたが、動けなかつた。  
そつ、俺の手足はなにかによつて縛られており、そのまま壁へと吊  
るされていたのだ。

正面から見るとキリストのような形をしており、かなり恥ずかしか

つた。

その時、前から太刀を構えながらハーブがやつてきた。もののすゞい負のオーラを放っている。

「ハーブさん？・・・なんのマネですか？」俺は不安げに尋ねる。

「えーこれから拷問を始めます」ハーブは少し笑つて言つた。  
しかし、目だけは死んだ魚のように笑つていなかつた。

「え？」俺はいきなりの展開に睡然とした。

「質問1・何を妄想していたんですか？」ハーブは太刀を構えながら言つ。

「ちょ、ちょい待つてくれよ！――

俺がそう言つと、ハーブは俺の顔の横に太刀を突き刺してきた。

「真剣に答えないと・・・わかるよね？」

俺はその時知つてしまつた。ハーブが魔物より恐ろしいことを。  
そして、俺は正直に答えることにした。じゃないと殺される可能性  
があるからだ。

「はい。自分はハーブ様と同居したらどのよつなことが起つるのか  
といつ」とを妄想していました。

そして、あんなことや、こんなこと、そんなことまで妄想してたら  
ああなりました。」

「良かつたー！もしハーブのことで妄想してなかつたら、右腕吹つ

飛んでいたよ？」

ハーブは相変わらず死んだ魚のような顔で言つてゐる。・・・恐ろしい。

その他にも色々と拷問されましたが、そこは割愛します。

「じゃあ本題にいります。ハーブを一生懲りますか？」  
いきなり何を言い出すんだ！と俺は思つた。しかし、JURGENと  
言つたら俺の命は無くなる。

「・・・・・・」

「一生懲しますか？」ハーブは太刀を俺の額に押し付けながら言つた。

「ハヒイイイイイイイ！」俺は叫んだ。しかし、これがハーブには  
「はい」に聞こえたらしい。

「こやつこやつこやつたああああああああ！」ハーブはいつも顔に戻  
つて叫んだ。

「へ？」俺は現状を理解していなかつた。しかし、気が付いたときに  
はもう手遅れだつた。

「ヒロユキーこれからもよろしくね！」

「そ、そ、そ、そなああああああああああああああああああああ  
（まあ嬉しいんだけどね・・・）

「！・・・」

こうして俺の2時間にも及ぶ拷問は終わりを告げた。

残高： 0 メイル  
収入： 11万 メイル  
支出： 5000 メイル

合計： 10万5000 メイル

## ダメ人間の鬼畜な拷問（後書き）

次回はアルメタ三大神との戦いになりそうです。  
感想・評価ください！

ダメ人間の一顛獸討伐～その1～（前書き）

だんだんマンネリ化してきた・・・

## ダメ人間の一顛獸討伐～その1～

目線：広幸

俺はハーブの2時間にも及ぶ鬼畜な拷問を終えて、心身ともに疲れきっていた。

しかし、魔術師からの依頼は俺の疲れなんて配慮してくれるはずも無かった。

「もしもしー、依頼です。今回でこの大陸の最後の戦いになりますよー。」

「……そうですか。ではまた今度……」俺は電話をきりうとした。

「ちよちよちよちよちよー今すぐ受けるんですよー」魔術師は焦りながら言つた。

「嫌です……もう疲れました」

「……仕方ないですね。でも今回の<sup>ターゲット</sup>標的はいつ現れるかわかりません。

準備を整えたなら休んでもかまいませんよ。しかし魔物が現れたらちゃんとやつてくださいね」

「わかりましたよー……で、今回の魔物は何ですか？」

「今日はですね……アルメタ三神の中でも最も強い魔物です。あなたもよく知っているはずですよ。この前私の狩ってきた『オルトロス』です。」

（図鑑データ）

オルトロス 別名：式顔獣 産物：式顔獣のアギト

ギリシャ神話で語られている一つの顔を持つ犬。

ギリシャ神話では落ち着きの無い性格として語られているが、こちらの世界のオルトロスは理性を持っている。しかし、かなり凶暴な魔物。

鋭利な牙と口から吐き出される炎により、敵を痛めつける。

「なるほど……でもこの山の二大神つてことは、あと一体は何なんですか？」

「ああ、その魔物は現在このアルメタ氷山からいなくなってしましました。

その代わり、あなたが次に向かう大陸に現れますよ。  
あ、奴には要注意してください。オルトロスよりも強いはずですから……」

「え！？・・・ま、まあまだ先のことですし大丈夫ですよね、うん。じゃあ報酬などを教えてください。」

「わかりましたよ。では報酬を教えますね。

基本報酬：6万メイル

産物報酬：式顔獣のアギト一個につき3万メイル

物品報酬：式顔獣チケット×10

今回は危険なミッションということもあって報酬も高くなります。良かつたですね～。

それでは今回も欲しいものがあつたらいつてください。」

「ああ、今回欲しいものはですね～・・・

・ピアノ線

・地雷魚 × 10

をお願いしますね。では「俺は電話をきつた。

あ、そういうえば地雷魚ってまだ説明してなかつたな。図鑑、図鑑つと・・・

（図鑑データ）

地雷魚

魚型の爆発する魔物。主に水の綺麗な湖に住み着いていることが多い。

この魚は非常にストレスを感じやすく、少しの衝撃でストレスを感じてしまつ。

そしてストレスを感じたその瞬間に自分の体を爆発させてしまうのだ。

本来は産卵のときに爆発して卵を遠くに飛ばすためにこの能力が備えられている。

とまあこんな魚らしいです（まだ見たことが無いのでわかつないんだが・・・

「ハーブ、準備が整い次第、この洞窟を出るぞ」俺はハーブに言つ。

「わかつた！」ハーブはもう機嫌を直していた。そして俺は物品が転送されるのを待つていた。

しばらくして、魔方陣が俺の田の前に現れ、いつものように物品が届いた。

その中に「5000メイルいただきますねー」という手紙も入っていた。

「よし、ちゃんとピアノ線も入っているし地雷魚も入ってる・・・」俺は地雷魚を見た瞬間に凍り付いてしまった。

地雷魚の口からなにかの臓器がはみ出しているのだ。俺はもう一度急いで図鑑を開く。

#### （図鑑データ）

地雷魚を使う際には手順があります。

- 1・地雷魚をどこかで入手する。
- 2・市販の地雷魚は安全装置として口から内臓がはみ出しているので、その内臓をちぎる。  
内臓が出でない場合はもの凄く危険です。あまり刺激を与えないようにしましょう。
- 3・仕掛ける。  
この際に刺激を与えると爆発する恐れがあります。細心の注意を払ってください。

とまあこんな感じに記載されている。俺はこの魚を買つたことを後悔した。

この気持ちの悪い内臓を引きちぎらないといけないなんて・・・

それは百歩譲つて見過ぎしてあげよ。しかし俺が一番嫌なのはそ

の次である。  
もしもミスつたら手元で爆発する 俺の異世界生活終了<sup>ライフ</sup>というわけだ。

そんなの許さない！やつとの世界を満喫してきたといひなの！  
そんなの許さない！やつとの世界を満喫してきたといひなの！

「ヒロユキ、行かないの？」俺はハーブに声をかけられた。  
俺はもう後悔しても遅いことに気が付き、渋々覚悟を決めた。

そんな落ち込んでいる俺をハッピーにさせる出来事が起った。  
なんと、魔術書が中に入っているではないか……俺は魔術師に感謝した。

そして、俺はその魔術書を開いてみた。するとそこには大きく『マジックウォール』と書いていた。

「なるほど。でも今は移動しないといけないし、今度読むか」  
俺は魔術書を閉じた。そしてオルトロスの現れると思われるアルメタ氷山の頂上を目指してハーブと洞窟を後にした。

目線：魔術師ロウ

「あら、広幸君はあの魔術を習得せずに行ってしまったんですか・・・」

これはもしかしたら大変なことになるかもしれないですね・・・  
あの魔術は魔力を圧縮・高気密化してたいがいの攻撃を防ぐ不可視の壁を作り出す便利な魔術なんですけど・・・

「あの魔術を覚えないでのオルトロス討伐は厳しいかもしませんよ、広幸君」

私もある魔術を使ってオルトロスを倒すことができたんですから・・・

残高：10万5000メイル  
収入： 0 メイル  
支出： 5000メイル  
合計：10万 メイル

## ダメ人間の一顛獸討伐～その1～（後書き）

今回はひっぱる予定です。ｗ

あと解説です

三大神の中では現在一番強くなっているのはオルトロスです。  
しかし、これから先で語られていくんですが、  
三大神の中の一体が次の大陸に移動して、  
その大陸で進化をとげてオルトロスを上回る力を手に入れたので  
矛盾のように感じますが違うと考えてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5527z/>

---

転生した異世界で金を荒稼ぎ

2012年1月8日23時42分発行